



第1集を読んで下さったあなたへ 続けて聖書を学んで行きましょう



ルカによる福音書から学ぶ 第2集

☆初めに☆

前回第1集を読んで頂いていかがでしたか。ルカによる福音から更に日毎の恵みを受けるために続けて第2集を出すことに致しました。初心者の方が、御言葉の中に記されている内容を通して、神が自分に語り掛けてくださっている神の声を聞き取っていくことができたなら、こんなに素晴らしいことはありません。

聖書はあなたを力づける言葉の宝庫だと言うことができます。しかも、単なる励ましを与えてくれるだけの言葉ではなく、この言葉は、著者の背後にあって語ってくださっている神様の御言葉であり、その神様はあなたのことをすべてご存知であって、どんなことをもなし得る驚くべき力を持ったお方によるお言葉ですから、あなたの人生を正し

く導いてくださることのできるお方からの御言葉として聞くことができるのです。ですから、あなたの人生の確かな羅針盤となることのできるお言葉なのです。

しかし、自分で読んだだけでそのように受けとめることはなかなかできないものです。そのお言葉を理解する手助けとなるように、書き記しています。それを用いて、ご自分への神からの語り掛けを聞き取って頂ければ、こんなに幸いなことはありません。これを読んで頂けることによって、神様がどんなにあなたを愛して導こうとしておられるかが少しずつ分かって頂けると信じています。

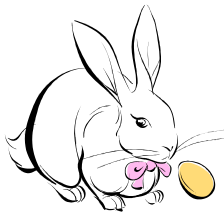
それでは、前回の第1集に続いて、ルカによる福音書を、少しずつ学んで行くことにしましょう。見えないけれども、今も生きておられる神様のことを思いながら読み続けてください。



目 次

- 2：1～7 イエスの誕生
1日 2：1～5 神の愛の歴史的事実
2日 2：6, 7 飼葉おけのイエス
- 2：8～20 羊飼いたちへの告知
3日 2：8～10 キリストのよき証人
4日 2：11, 12 きょうの救い
5日 2：13 きよい讚美
6日 2：14 霊の平安
7日 2：15, 16 御言葉の実践
8日 2：17～20 探求心のある信仰
- 2：21～39 宮詣で
9日 2：21～24 律法の下に生まれたイエス
10日 2：25, 26 待ち望む信仰
11日 2：27, 28 聖霊の導き
12日 2：29～32 御子イエスを神の子と信じる道
13日 2：33, 34 人類を2分するイエス
14日 2：35 相反した人生
15日 2：36～39 真実な主のしもべたち
- 2：40～52 イエスの少年時代
16日 2：40 恵みに応答する信仰
17日 2：41～47 少年イエスの賢さ
18日 2：48～50 天の父よ
19日 2：51, 52 愛されることを学んでいく人生
- 3：1～14 ヨハネの宣教
20日 3：1, 2 ヨハネの宣教開始
21日 3：3 悔い改めのバプテスマ
22日 3：4～6 2段構えの救い

- 23日 3:7~9 固定観念を捨てる
24日 3:10~14 悔い改めにふさわしい実
3:15~17 メシヤのなされるみわざ
25日 3:15, 16 自分の感覚に頼ってはならない
26日 3:16 聖霊と火によるバプテスマ
27日 3:17 選り分けられるメシヤ
3:18~20 ヨハネの投獄
28日 3:18~20 神からの使命
3:21, 22 イエスのバプテスマ
29日 3:21, 22 主イエスへの神からの任命
3:23~28 イエスの系図
30日 3:23~38 あがないの系図



小区分 (2:1~7 イエスの誕生)
1日 2:1~5 神の愛の歴史的事実

人は、神が定めておられる時を見ることができません。ですから、神がこれからなそうとされることに全く気付かないのです。日頃の事に心を奪われている時に、神は今、すべての準備を整えた上で、神の子イエスをマリヤから生まれさせようと、その定めた時に実現するように、誕生の時をじっと見守り続けておられたのです。

しかも、当時の世界を支配していた、(イエス様がお生まれになったユダヤの国は、当時の世界を支配していたローマの属国となっていました)この時のローマの皇帝は、もちろん神への信仰を持っていませんでした。そんな信仰のないローマ皇帝アウグストの心の中に、神は一つの思いを起こさせられたのです。本人は、自分で思いついた良い考えだと思っていたのですが、本人は気づいてはいなくても、それは神が、彼の思いの中に起こさせた思いだったのです。その思いとは、自分の支配する世界の規模を把握するために、人口調査をしようとしたのです。この時代の人口調査は簡単ではありませんでした。今住んでいるところから、生まれ故郷に行って記入させるという人口調査の勅令を発令させたのです。その結果、マリヤとヨセフの子として(実際には、マリヤの上に聖霊なる神様が臨んで生まれることになるのです)今住んでいるナザレの地でお生まれになるのではなく、預言されていた通りベツレヘムでお生まれになるようにと、ローマ皇帝が考えた人口調査を用い、見えない御手でもって、マリヤとヨセフとを、ナザレからベツ

レヘムへと導かれたのです。

これは何と不思議な情景でしょうか。どれ一つ取ってみても、イエス様のお誕生は、神によってご計画された奇蹟としか説明できません。お生まれになった時期、場所、状況すべての点で奇蹟によるものと言いきりありません。しかし、それ以上の大きな奇蹟は、何と云っても、神ご自身が、人の形を取ってこの世に降ろうと御計画されていることだったのです。

著者ルカは、それを単に美しい話として、この話を載せたのではありませんでした。また、人々に、イエス様のお誕生日が何時かを知らせ、その日を記念としてお祝いするようにと望んで記したのでもありませんでした。今日、私たちが祝日として祝っているクリスマスは、ルカの記した意図を全く無視して作り出されたところの、形だけの無意味な祝い事に引き落としてしまっていないでしょうか。

ルカは、イエス様が何時お生まれになったのか、それが何月であったのか、何の興味も示しませんでした。ルカが示そうとしている神からの福音に、そのようなことが重要だと僅かも思わなかったからです。現在祝われている 12 月 25 日のクリスマスは、4 世紀中頃にある人たちによって勝手に取り決められたもので、ミトラ教の太陽の誕生日を借用し、イエス様の御降誕が「真の太陽」の御降誕だとしてこの日を定めたと言うのです。ということは、12 月 25 日にこだわらなければならない根拠はどこにもないと言うことが分かります。

それでは、ルカが主イエス誕生の記事を懸命に調査し、ここに書き記したのは一体何のためだったのでしょうか。それは、神が、罪に囚われた虚しい人生から人類を解放させたいと考えられ、人間の世界に介入して下さったという、

天地がひっくり返るような驚くべき神の愛の歴史的事実を伝えるためであったのです。あの栄光に満ちた天の御座を後にして、呪われた罪の世界に降りてきて下さったという神の愛の事実を、ルカは読者に知らせようとしたのです。

演出されたクリスマスは、商業的に利用しようとする人たちの思惑もあって、主イエスの誕生をできる限り美しく描き出そうとします。そして私たちは、そのようなクリスマスのお祝いの仕方が、信仰者として正しい向かい方であると思いつく環境の中で歩んできました。しかし、最初のキリスト教会では、決して美しいクリスマスを描き出そうとはしてはいなかったのです。

初代の教会が福音として伝えて行ったのは、マルコによる福音書にあるように、バプテスマのヨハネの宣教からでありました。マタイもそうであったと思いますが、ルカがあえて主イエスの誕生の記事をここに記したのは、この御降誕の歴史的事実、すなわち、そこに込められている、神の溢れるまでの愛の事実が、呪われた罪の世界に人のかたちを取って降って下さった御降誕に示されている神の御心が、何と、十字架にかけられるようにされるという神の御計画へとつながっている一連の欠かせない重要な福音だと霊に感じたからです。

罪人に対する驚くべき神の愛を、ドラマ形式で描き出してみるならば、イエス・キリストの御降誕は序幕であり、十字架はクライマックスであり、復活、昇天は終幕であります。イエス・キリストの十字架と復活に表されている神の御心が、真の意味で理解され、心に迫ってくるものとなるために、著者ルカは、まず、神が人となられたという、神の驚くべき愛の深さを、書き記さずにはおれなかったのでしょうか。

「神が人となられた」、これ程信じにくい事柄はありません。けれども、それが事実であるなら、これ程、神の愛の深さを表わす事柄はないと言えます。そしてこの愛がますます深められて行って、十字架、復活へと流れ込んで行くのです。信じにくいこれらの内容が、人間に理解しやすく、信じやすいように創作された、荒唐無稽の作り話だとはけっして思えません。かえって真実であることが分かります。

単に人間の気を引くことが目的であるならば、こんな信じにくい内容をどうして書き記そうとするのでしょうか。ルカは、人間が信じにくいかどうかを考えてこの記事を書いたのではありません。神が人類を救うためには、どうしてこうでなければならないとお考えになったのか、深いお心を持って欠かせない必要なみわざとしてなされた間違いのない神の真実だと、ルカは明らかにしただけです。

何という世的感覚からかけ離れた示し方でしょうか。人間が受け入れやすいようにするために、ただそのことを第1に考えて、神はこのようなみわざをお考えになった訳ではありません。神が罪人を救おうとされるためには、それがたとえ信じにくい内容であろうと、ご自身の正しい御旨を通されるためには、このようになさるしかなかったのです。そしてルカは、それを、動かすことのできない事実であることを示しているのです。

信じにくいかが信じやすいかが問題なのではなく、その出来事に神の愛と真実なお心とがあますところなく示されていることを受け取れるかどうかが重要なのです。

私たちは、この御降誕の記事を美しく描き出し、仰々しくお祝いすることに心を向けるのではなく、神が人となって下さったという事実、神の愛の深さを感じ取り、この私を罪から救うために、あえて人となってこの地上に生ま

れて下さったのだと信じて喜んでいたいのです。そして、この事実が、十字架と復活に表されている神の大きな恵みにあずかる前提であることに気付いて、クリスマスを祝うのではなく、私への神の愛の御心として、心から感謝する者でありたいと思うのです。



小区分 (2:1~7)
2日 2:6, 7 飼葉おけのイエス

人口調査の勅令が発されたので、ヨセフとマリヤはナザレから旅立って、ヨセフの生まれ故郷のベツレヘムへと向かいました。出産が間近な時であったにもかかわらず、長旅をしなければなりません。ルカは道中の大変さについてはカットして、なんとかベツレヘムに着いたことを記しています。しかし人口調査のため、宿屋が混んでいて泊るところがなく、雨露をしのげる場所として馬小屋に泊まらせてもらうことになり、ほっとしたのも束の間で、マリヤに陣痛が起こり、旅先のベツレヘムにおいて初子を生むことになったのです。

あまり詳しいことは記してはいません。ただ神の子イエ

スの最初に寝かせられた所は、何と、衛生状態のよくない馬小屋の中にある飼葉おけであったと言うのです。もちろん藁は新しいものに変えられていたと考えられますが、神の御一人子イエスの誕生の情景を、このように書き記さなければならなかったルカの心痛が思われるのです。本当は、御子の誕生をもっと美しく描きたいと思う心もあったのではないのでしょうか。

ルカ自身、この出来事を聞いて知った時、人々の期待とはあまりにもかけ離れているので驚き惑ったのではないのでしょうか。すべての状況を設定される力をお持ちである神であるのに、そのなされることのあまりの不思議さに、このことを書き記すべきかどうか思い悩んだかもしれません。

しかし、十字架にかかって下さった主のことを思う時、この世的に見ればもっとも低い所にまで降って下さったと言えますから、御子として誕生して下さった時も、もっとも貧弱な家畜小屋で生まれることになり、全人類を救いに導き入れるためには、ご生涯の初めから終わりまで、とことん低くなって下さったという一貫した神のあわれみの思いを感じずにはおれなかったと思われます。

すなわち、それは、どんな低い所にいる者をも救い上げるために、ご自身をもっと低くなられたと言えます。著者ルカも、これを、人間的に感動を与える美しい情景に作り変えて、人々に伝えようとは思わず、神の御心を正しく伝えるためには、これをありのままに、何の脚色もせず書き記さずにはおれなかったのでしょうか。

ここで一つの疑問を考えてみましょう。なぜ彼らは、宿屋に泊まる部屋を見出だせなかったのでしょうか。7節後半に「客間には彼らのいる余地がなかったからである」と記されています。この言葉を、伝統的な解釈に従って考え

ますと、人口調査のために、各地からきた人々で混雑して、彼らがベツレヘムに着いた時には、すでにどの宿舎も満員で締め出され、何とか身体を休めるだけでもと、泊まる所を捜し当てたのが家畜小屋だったと言うのです。

本当にそうだったのでしょうか。そのように思えないふしもあります。ヨセフが思慮深い人で、心の優しい人であったということが理解できるし、マリヤが身重であったので、無理な旅をすることなく、マリヤをいたわりつつ余裕を持って旅をしたと思われるのです。とすれば、泊まる所が全くない程遅く着いてあわてるというような失敗をするのかどうか疑問です。

マリヤのためには、決してそんなことがないようにと注意を払っていたと考えられますから、泊まる所がなかったなどとは考えられないことです。ただ泊まる人が非常に多かったことは確かで、すし詰めのような部屋に、何時子供が産まれるかもしれない身重のマリヤを泊めさせることはできず、余裕のある部屋がどこにもなかったのでしょう。子供が産まれたとしても周りに迷惑のかからない所、また、マリヤにとっても安心のできる所とは、その状況の中では、家畜小屋しかなかったのでしょう。

もうすぐ生まれそうだということは、体の徴候から感じ取っていた筈だからです。また、このよう状況に置かれたのは、旅の途中において、ベツレヘムで産まれるように、預言通りに導かれた神のご計画によるものだったということが分かります。

このようにして、神の尊い御一人子が生まれるというのに、この世で用意された所は、誰も考えもしなかった家畜小屋であったと記しているのです。そこは風通しが悪く、悪臭は鼻につき、ハエが飛び回っていると考えられる家畜

小屋でした。御子イエスが、飼葉おけに寝かせられたという記事を読む時、私自身、心が痛みます。どうしてもっと良い部屋に迎え入れることができなかつたのでしょうか。

いや、私自身、以前には、主を自分の中の家畜小屋のようなところに入れて平気であったことを思い起こします。けれども今は、私の主人として、主イエスを心のもっとも良い部屋にお迎えすることができるようになり、このお方の下において生きることができるようにされたことが嬉しくて、感謝で一杯にされています。

使徒ヨハネはこう言っています。「彼は自分のところにきたのに。自分の民は彼を受け入れなかつた。しかし彼を受け入れたもの、すなわちその名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(ヨハネ 1：11、12)。

多くの人々は、主を家畜小屋に追いやって平気でいます。けれども、この世でもっとも低い所である飼葉おけの中にきて下さった御子イエスを、私の主人としてお迎えする者は、それだけで神の子として頂けると言っているのです。

本来、罪人であって、神に対する反逆者の立場にいた私たちが、御子イエスを、私の主人としてお迎えするだけで、罪深い私たちが、神の養子とされ、神の子という素晴らしい身分がその時から与えられるようになるというのです。普通、このようなことは考えられないことです。

しかし、人間の考えられないようなことを、神は愛の故になしてしまわれたのです。このことを信じさえすれば、私たちはもはや罪人のまま生きる必要はなく、神の子という身分が与えられ、神からの祝福を全身全霊に受けることができるのです。何と言うもったいないばかりの恵みでしょうか。この恵みが分からない人は、悲しいかな、汚れた罪人のままの人生を送るしか道がないのです。

この恵みを受けることのできる人は、すぐれた人でも、力ある人でもありません。ただ私のために、もっとも低い家畜小屋で生まれて下さったのだということを信じることのできる人だけなのです。ここに2重にも3重にも、神の深い愛とそのご配慮とを見ることが出来ます。



小区分（2：8～20 羊飼いたちへの告知）
3日 2：8～10 キリストの良き証人

すべての民に与えられる、大いなる喜びであるこのニュースを、まず名もない地位もない羊飼いたちに伝えられたのは、一体どういうことなのでしょう。救い主誕生の喜びを待っていたのは、彼らだけだったのでしょうか。そうではなかったはずです。イスラエルの民すべてが待ち望んでいたのです。

普通に考えれば、神の民すべてに告示する者として用いられる人は、当然、神がメシヤ（救い主）を遣わして下さることを伝えてきた、ユダヤ教の指導者である筈でした。そのトップである大祭司が、国民を一堂に集めて、すべて

の人々が見ている目の前で、救い主として生まれた幼な子を持ち上げて、うやうやしく祝福し、「神の民イスラエルを救うお方はこのお方である。このお方こそ、神が遣わされたキリストです」と宣言するなら、効果抜群で、誰も疑ががうことはないと思わされるのです。

その方が人々の心に受け入れやすいと思うのです。なのに、神は、なぜかその方法を取られませんでした。もし羊飼いがこのことを伝えたとしても、だれも本気にしないと思われるのが普通です。どうしてそのような羊飼いたちに、その喜びを伝えられたのでしょうか。神の御思いは、いつも人間の思いとは大きく異なっているのを見させられます。

神が、イエス・キリストをお遣わしになったのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためでありました。宣教を始められたイエス様もこう言っておられます。「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。…わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マタイ 9:12, 13)と。神は、罪をもっともいみ嫌われるお方であるのに、なぜ罪人の方をお招きになるのでしょうか。不思議です。

しかし、これが福音なのです。神は罪を嫌われるのですが、人を愛しておられます。それ故、罪人を招いて、その人から罪を取り除こうとして下さるのです。ルカ 15:7の御言葉がそのことをよく現しています。「…罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔い改めを必要としない99人の正しい人のためにもまさる大いなるよろこびが天にあるであらう」。

それでは、ここで言う正しい人とはどのような人のことを言うのでしょうか。それは、自分の内に罪を認めようと

しない者のことです。そのような人の罪を、神は取り除くことができません。

罪を認めようとしなない者、これが自称義人なのです。当時のユダヤ教指導者たちは、ほとんどこの義人だったのです。ですから、この人たちにとっては、罪の赦しを得させて下さる救い主としてのキリストを必要とはしていなかったのです。彼らが必要としていたのは、政治的に、ユダヤの国を独立国にし、神が聖別された自由の国にしてくれる王なるキリストを求めていたのです。それ故、彼らは、罪の赦しを得させて下さるイエス・キリストの誕生を大喜びして伝える器ではなかったと見られたのです。

神が、この大いなる喜びを伝える器として選ばれたのは、何と実に無名の、学のない、素朴な庶民であり、自分を義人としなないような羊飼いたちだったのです。人生の悲哀や喜びや、労苦や愛憎をなめつくしている下層階級の庶民に、神は御子の福音を伝えさせようとして、羊飼いたちをお選びになったとは、何という皮肉でしょうか。

今日の私たちが考えてみても、キリストの良き証人として立てられるのは、やはり弁達者な、知識のある、指導者的な人だと思わないでしょうか。人の思いはこのようであっても、神の思いはそうではなかったのです。羊を相手に話をする事しかしない者、昼も夜も働かなければならない者、貧しい日々を送っている者、知識のありそうにない者を、神はあえて選んで、この大いなる喜びを伝える器として立てられたのです。

どうしてこのようにされたのでしょうか。神のご性質が気ままだからなのでしょう、決してそうではありません。というのは、この世的に見て、立派な指導者的な人だと思える人は、どうしても自分の力を誇りやすい心が潜んでい

ますから、自分の力量で証言しようとしやすいのです。しかし、世的に低い人、学のない人、口べたな人というのは、自分の内に何ら誇るものを持っていないと自覚しており、神は、こんな役に立たない私を、大いなる喜びを伝える器として選んで下さったということを素直に喜び、自分に伝えられたところの、ありのままの福音を証言しようとするのです。というより、それしかできないのです。

キリストを信じた者は、そのあまりにも大きな喜びの故に、それを他の人に伝えたいと言う強い思いが起こされ、キリストの証人となるのです。それ故、キリストの良き証人とは、実に、このありのままを飾らずに証言する人のことを指していると言えるでしょう。この驚くべき朗報を、羊飼いにまず伝えられたのは、神のこのようなお考えからでありました。主が、証人として選び立てられるのは、ごく普通の庶民であります。何ら取り柄のない私たち庶民を、主はキリストの証人として立てて下さっているのです。この事実を素直に認めて喜び、恐れることなく、キリストを宣べ伝えていきたいと思うのです。

イエス様が十字架に架かれた後、残された弟子たちの上に聖霊が注がれました。こうして聖霊は、無学な、ただの人たちであったペテロとヨハネ（使徒行伝 4：13）とを用いて、大胆にイエス様を証ししていくように導かれたのです。その聖霊は、同じように、今日の私たちをも用いて、神の深い愛の御心を証言していくようにして下さいます。キリストの救いを頂いた喜びに溢れた証人として……。



小区分 (2:8~20)
4日 2:11, 12 きょうの救い

今日も変わりなく、この暗い夜も無事に守られるようにと願いながら羊を守る仕事をしていた羊飼いたちに、突然、真昼のようなまばゆいばかりの光が照り輝いたのですから、何とびっくりしたことでしょうか。そればかりではなく、これまで見たこともない光輝く天使が、急に目の前に現れたのです。それが空中であったか、地上に立たれていたか記されてはいないので分かりませんが、羊の囲いの中にいた羊飼いたちの前に現れたのです。これらのことが一瞬の内に起こったので、驚いたというよりも、その異様なまでの光景に、言い知れない恐れすら覚えたように見られます。

ここで、羊飼いの仕事や生活がどのようなものであったか知っておくことも、聖書の内容を理解するための助けになるでしょう。パレスチナ地方の羊飼いは、過ぎ越しの祭り(3月~4月の間)の頃から、雨季に入る11月下旬の頃までは、青草を求めて野山に移動し、昼夜区別なく屋外で生活したのです。夜になると、そこに作った囲いの中に羊を入れ、交替で見張りをします。それは野獣や盗人から羊を守るためでした。しかし、それ以外の冬の間は屋内で羊を飼っていました。

羊の世話は、容易で平和な職業でありましたが、その反面、一所に落ち着いた生活ができないので、楽な仕事では

ありませんでした。キリストが、羊飼いと羊との関係を描かれた例え話を話されたように、羊飼いと羊との間には深い深い信頼関係がありました。

人は荒っぽい生活を続けていますと、性格は荒っぽくなり、愛の配慮を持つ生活を続けていますと、思いやりのある性格になっていくものです。羊飼いたちはどのような性格だったのでしょうか。たぶん仕事の性格上、羊のことにいつも心を配っていたので、思いやりがあり、野獣や盗人から守る勇気を持つ人々であり、素朴であったと思われま。もちろん、いい面だけではなく短所もあったと思いますが、ともかくこの時には、その長所が活かされ、用いられたと思うのです。

このような羊飼いたちが、夜の見張りをしていた時に天使が現れ、神からの御告げを語ったのです。「きょう、ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。このかたこそ主なるキリストである。あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それがあなたがたに与えられたしるしである。」という内容でした。

彼らは、天使の言葉に耳を疑いました。彼らも、神が救い主を遣わして下さると約束して下さっていることを聞いてよく知っていました。期待もしていたのです。その救い主が、長い間待ち望んできた救い主が、今お生まれになったって？ 本当だろうか。そんな重大な出来事をどうして私たちのような無学な者たちに知らせられたのだろうか。羊飼いたちにとって、天使の告げる言葉は信じ難いことばかりでありました。

キリストが来られるまでの時代、すなわち旧約の時代においては、将来いつの日か、キリストが遣わされるという、

神の救いの約束を待ち望むことが、唯一神信仰の大事な特徴でありましたが、新約においては、この羊飼いたちが天使の御告げを聞いた時から、すなわち御子イエスが、私たち罪人のために人となってお生まれ下さった時から、「きょう」という救いが成就したのです。パウロは「今は恵みの時、今は救いの日」（Ⅰコリント6：2）と言いました。私たち人間の方が、心を主に向けるならば、いつでも救いが“きょう”となるようになったのです。

全く新しい時代の幕開けであります。長い間の学問の積み重ねや、厳しい修練や、豊富な人生経験を経て救われるのではなく、私たちが、自分の罪深さを知り、自分の内に、または、この世の中に何ら頼ることができるものが全くないことを知り、救われる道は、私たちを救い得る力のあるお方に助けを求めることであることに気付いて、主の方にさえ向くならば、そこには「きょう」という救いがある。どんな人をも拒まない「きょう」の救いがある。そこには人間的な意味で出直す必要がありません。ただ主にさえ心を向ければ、主が救って下さるといいます。これは何という恵み深い福音でしょうか。

神を信じる者にとって、日が悪いという日は一日もありません。すべての日は、神に与えられた日であり、恵みの日なのです。「きょうみ声を聞いたなら、あなたがたの心をかたくなにはいけない。」（ヘブル4：7）と言われていました。神は、私たちに今日も御声をかけて下さっているのです。このことを決して忘れてはなりませんし、おろそかにしてもいけません。私たちは、今日も救いの御声を聞いているでしょうか。これが神を信じる者の一日を決める事柄であります。

長い間待ち続けていた事でありましたから、羊飼いたち

にとって「きょう」という言葉は、大きな響きを持って彼らの心に響き渡っていったことでしょう。「きょう」の救いであったので、彼らは水を得た魚のように、その心は踊り上がったのです。



小区分 (2:8~20)
5日 2:13 きよい讚美

羊飼いたちは、ベツレヘムの近くの野原にいたと思われ
ます。2:17ではその後、人々に伝えたところから、時
はまだ、人々が起きていた夕方頃でありました。人々の起
きていた時刻でありましたが、近くの野原で御使が羊飼
いたちに現れて「キリストがお生まれになった」との御告
げを聞いているとは、その近隣に住んでいた人々でさえ、誰
一人知ることもなかったのです。羊飼いたちがいた野原と
ベツレヘムとはだいぶと離れていたのでしょうか。御使いが、
ベツレヘムの人々、すなわち、町にいる人々に現れること
をなさらず、暗い野原で夜番をしていた羊飼いたちに現れ

なさったのはどうしてでしょうか。

主の御使いが語り終わると、これまた突然に、夜空が昼の空のように輝きわたり、天に無数の天使の群が現れたのです。天使は、人間の目に見えない霊のからだを持っている存在ですが、それをいつでも瞬間的に人間の目に見えるからだに変えることのできる驚くべき力を持った存在であります。この時は、無数の天使たちが、一度に目に見える形になって空一杯に現れたと言うのですから、それはそれは、荘厳な光景であったと思われます。

羊飼いたちは目を見張りました。目だけではない、突然の驚くべき大合唱に、うっとり聞き入らずにはおれませんでした。何という見事な賛美でしょうか。夜の野原における大コンサートでありました。それを聞いていた観客が、わずかの羊飼いたちだけであったとは、何ともったいない話ではないでしょうか。

この時に歌われた天使の賛美は、神への賛美の中でもっとも素晴らしいものでありました。その声の美しさといい、ハーモニーといい、最高であったと思われます。地上のどんな聖歌隊であろうと、天使の聖歌隊にかなうものはありません。神を賛美することは、天使たちにとって第1の仕事であり、決して欠かすことのできないものでありましたから、昼も夜も（霊の世界に、昼や夜の区別がある訳ではありませんが）賛美し続けているのですから、当然と言えば当然です。

声やハーモニーだけではなく、その内容の高貴さも、一段と霊的水準の高いものであって、これに比べる事ができるものは他にありません。しかし、これらのことが、天使の賛美がもっとも素晴らしい理由なのではありません。天使の賛美が素晴らしい第1の理由は、彼らがきよい心に

より、また神をあがめずにはおれない心から賛美しているからだと言えます。このきよい賛美は、私たちを感動させずにはおれません。真の賛美とは、このきよい賛美のことを言うのです。

この世における歌の追及しているものは、声の美しさとハーモニーであり、少し高尚なものになると、その内容をも追及します。しかし、きよい心をもって歌うことを追求するものは何一つありません。ただ神への賛美のみがこれを必要としているのです。

私たちは、賛美するという一つのことにおいても、このように世の感覚と全く切り離さなければならないのです。私たち神を信じる者の賛美も、ともすればそのメロディーの美しさ、あるいはハーモニーの美しさ、声の美しさの方を追及することに、つい熱心になってしまいやすい危険があります。これでは命のない賛美となってしまいます。

また、言葉の美しさや内容の高尚さを追求することもあります。第1のことを忘れていたならば、これも命のない賛美と言わなければなりません。確かに内容は大切であります。しかし、私たちの求めるべき賛美は、まずきよい賛美でなければならないことをしっかりと心にとめなければならないのです。

声もハーモニーも内容も良いのにこしたことはありませんが、人に聞かせることが中心ではありませんから、たとえ少々音がズれていたとしても憶することなく、きよい心をもって賛美することができます。きよい心を持ってとは、神を心から愛し、神から受けているあわれみと恵みとを心に思い、この世の雑事に心を捉われず、一心に主をみつめて、聖霊の助けを頂きながら、神の素晴らしさを思って賛美をするなら、神は、その賛美をきよい賛美として耳を傾

けて下さるのです。

こうして、私たちの心に神への感謝の思いが満ち溢れるならば、きよい賛美へと導かれていきます。もちろん天使たちの賛美の崇高さには到底及びませんが、私たちの賛美も、神の喜んで下さる真の賛美へと近づけられていきます。そのような賛美が、また、私たちの靈性を高く引き上げてくれるのです。



小区分 (2:8~20)
6日 2:14 霊の平安

天使たちは、一体どのようなメロディーでこれを歌ったのでしょうか。今となってはただ想像するしかありませんが、それを唯一、聞くことのできた羊飼いたちは幸運な人たちでありました。彼らがとても羨ましく思えるのです。彼らは天使たちが歌った賛美を、いつまでも心にとめていたことでしょう。たえず心の中で繰り返し、歌われた賛美の意味について思いめぐらしたことでしょう。

天使たちの歌った内容がここに記されています。ある翻

訳の方が正しく理解しやすいので、それを記しましょう。「いと高き所にては神に栄光、地上にては平安、御心にかなう人々にあり！」このように歌われたのは、救い主キリストがお生まれになったということに関連してであったことは言うまでもありません。それ故、キリストが今日お生まれになったことにより、高き所（位置的に高いと言う意味ではなく、神がおられる、目に見えない場所を指しています）におられる神は栄光をお受けになった。そして、地に住む、神を敬う人々には平安が臨んだと言うのです。ここでは普通「～があるように」という願望のように考えられていますが、「キリストが今日お生まれになった」と告知知らされている後を受けて、歌われている賛美であることを思いますと、そうなってほしいと言う願望のように歌われているとは思えないのです。「今日、そのことが実現しました！」という宣言と見る方がふさわしいでしょう。

「すべての人を照らすまことの光があって、世にきた」とヨハネによる福音書の方では言われています。（ヨハネ1：9）まことの光が世においでになった。すなわち、神が人となって世に来て下さったというこの事実が、今までの願望の時代から実現の時代へと移ったことを意味して歌ったのです。

神は、ご自身の御子をお遣わしになった時点で、すでに栄光をお受けになりました。同じようにこの時点で、地に住む人々には、特に神を信じる人々には、上よりの平安が臨んだのです。何という確信に満ちた、霊的水準の高い賛美でしょうか。この賛美を、実現したキリストの誕生から切り離して、神に栄光があるように、地上に平和が来るようにと解するなら、全く力のない賛美となってしまいます。

天使たちは、自分たちの信仰の目を持って見たことを高

らかにほめ歌うのです。神は今、栄光をお受けになった。神の知恵は称えられ、神の愛はあがめられると。そして地に住む人々に平安が与えられた」と歌います。

「地の上では……平和がありますように」とも訳せなくもないのですが、こう訳しますと、地上に戦争がなくなりますようにとの願望のように聞こえてしまいます。主イエスがおいでになってから、現実においてこの地上から戦争がなくなったと言えるでしょうか。あるいはなくなりつつあると言えるでしょうか。決してそうは言えないのです。

各地において戦争や内乱が起こり、一向になくなりそうな気配もありません。イエス様も、世の終わりについてお話しになった時、「世の終わりには、この地上から戦争が全くなくなって、素晴らしい楽園になる」とは言われませんでした。かえって各地で戦争のニュースを聞くことになるかと語っておられます（マタイ 24 章他）。それでは天使たちが歌ったのは単なる願望に過ぎなかったのでしょうか。そうではありません。次のような意味で歌われたのです。

「神が人となって下さったこと、この驚くべき事実が、神を待ち望む人々に霊の平安を与えることになった」と言うのです。霊の平安は、神との和解を得ることによって与えられるものでありますから、神が人となって下さったという事実が、神の怒りを受けていた罪人（人間が神の御言葉に従わないで、自分の思いで生きようになった状態を、神の怒りを受けている罪人と見られるようになったこと）にとって、神との和解を与えられるという恵みとなったと歌ったのです。

私たちにとって、霊の平安が与えられるということは何と大きな力でしょうか。私たち一人一人がどんな立場に置かれていても、たとえば貧乏であろうと、病気をしておろ

うと、死にひんしておろうと、世界が混乱しておろうと、戦争が起こりそうであろうと、私たちの内側に、神との和解を得て、霊の平安が与えられているなら、何も恐れることはなく、また、どんなものもこの霊の平安を私たちから奪うことはできません。神が「よし！お前は私の子だ、私はお前を喜び、お前の罪はすでに赦した。私はあなたを愛している」と言って下さっているお言葉を聞いているのですから、その霊の平安は動かされることがないのです。そしてこれが、私たちに生き生きとした喜びを与えてくれる原動力だと言えるのです。

キリストがお生まれになったことにより、人々にこの霊の平安が与えられることになった、と天使たちは歌ったのです。私たちの心を慰めずにはおかない、何と素晴らしい賛美でしょうか。私たちの上に実現した恵みとして、私たちも、天使たちと声を合わせて心から賛美できるのです。



小区分 (2:8~20)
7日 2:15, 16 御言葉の実践

夜の野原における大コンサートが終り、暗闇と静寂が戻ったのです。しかし羊飼いたちにとって、今もなお続いているかのように余韻が残っている時、羊飼いたちはハッと我に帰りました。今見た不思議な光景と、その御告げとについて、互いに話し合ったのです。「これは信じがたいことだが、御使いが現れ、御告げを示してくださったことは、紛れもない事実だ。さあ急いで、その御告げに従って、救い主となられる乳飲み子を捜しに行こう」。こう思い立つと彼らは、羊を神のお守りにお任せして、町へと走って行ったのです。このような姿に、彼らの素朴な性格と素直な信仰がよく現れています。

彼らはもはや、御使いの言葉に何の疑いをはさむこともなく、一目散に駆け出して行ったのです。その場所が一体どこであるのか、はっきり分からないのですが、彼らは宿屋の家畜小屋を手当たり次第捜し回って見付け出したのです。飼葉おけの中に寝ている乳飲み子、それは御使いの語られた通りの光景でありました。羊飼いたちは、大喜びで乳飲み子の回りを取り囲んだのです。その近くにはマリヤが横たわっており、ヨセフは愛しげに、じっと乳飲み子を見詰めていたことでしょう。

彼らは、不意の闖入者たちに驚きましたが、羊飼いたちの目的が、乳飲み子を見るためであったことが分かって、安心すると共に、なぜこの子が産まれたことが分かったのだろうと不思議に思ったのです。それが御使いの御告げによって分かったのだということを羊飼いたちから聞いて、これは、天が注目して下さっている重大な出来事なのだと、彼らは改めて思ったのです。

マタイによる福音書では、天使から直接聞いたものではありませんが、東から来た博士たちが、星を頼りにエルサレ

ムにたどり着き、メシヤとして生まれた方はどこにおられますかと問うた時、ヘロデ王は、祭司長や律法学者たちを全部集めて問いただすと、彼らは即座にユダヤのベツレヘムですと答えました。彼らはそのことをよく知っていたのです。博士たちが、メシヤが生まれたと言っているのに、お前たちに何が分かるかと本気にしなかったのか。それとも、自分たちに示されていないのに、こんな異邦人（ユダヤ人以外人間が、神から見捨てられている異邦の民だと考えていました）に分かるはずがないと思ったのか、メシヤが生まれるという表現に、そんなことはあり得ないと思ったのか、ベツレヘムだと分かっているのに、誰一人本気になってメシヤを尋ね出そうとはしなかったのです。

なぜでしょうか。それは、彼らの信仰は、いつの間にか頭だけの信仰となってしまっており、神の御言葉を本気で信じて、尋ね求めるという求道心と行動力が全く欠けていたからです。これが当時一流の宗教家たちの実情であったと言うのですから、虚しい思いにさせられます。

それでは、一般のユダヤ人はどう反応したのでしょうか。2:18を見ますと、「人々は不思議に思った」とあります。メシヤを待ち望んでいると口では言いながら、メシヤが誕生したと聞いても、羊飼いたちの言葉を信じようとせず、彼らに御使いからの御告げがあったなどと考えられないと思ったのか、それを確かめるために見に行こうともしないで、ただ不思議がるだけでありました。

これらの人たちに比べて、羊飼いたちはどうだったのでしょうか。他の人たちと違って、御使いから直接聞いたという、驚くべき体験をしたという違いはありますが、彼らは御言葉を聞いたなら、すぐ実行に移したのです。羊飼いたちが、羊の見張り番という職務まで放り出してまでいく

ということはなかなかできないことです。というのは、羊飼いたちの責任によって、もし羊を損なったり盗まれたりしたならば、彼らは雇主に、その代償を支払わなければならなかったからです。彼らは、自分たちの信仰によって、メシヤ誕生という驚くべき事柄が、少し位の代償をも物ともしない程の重要な事柄だと思ったので、御告げを信じて、羊の世話よりも、御子を拝することを、何にも勝って優先させたのです。

私たちはどうでしょうか。私たちが御言葉に接した時、ほとんど頭だけにとどめてしまっているということがないでしょうか。羊飼いたちの姿を見て、そのことを深く思わされるのです。

当時の一流の指導者たち、祭司長、律法学者たちにせよ、一般のユダヤ人にせよ、御言葉に触れる機会が与えられていても、彼らはその御言葉を尋ね求めようとはしませんでした。福音が福音としての力を発揮するのは、聞いた人が、福音に素直に答え、福音に対して行動をもって実際に聞き従った時だけあります。聞いた御言葉を実践し、その御言葉を確認するなら、神はそれに応えて下さり、私たちは御言葉を確認できる喜びに満たされるのです。

しかし、聞いて知っているだけ。本当だろうかと思うだけでとどめているなら、福音はその人にとって福音とはならず、単なる言葉飾りとなってしまいます。確かにみ言葉を実践するということは本気で信じなければならぬから大変な事です。しかし、この歩みしか、御言葉を確認し、確信できる喜びを得ることができないのです。

もちろん、聞いた御言葉を実践することによって、必ずしも、すぐ確信をもたらされるとは限りません。羊飼いたちが、手当たり次第捜し求めたように、暗中模索の時もあ

るでしょう。しかし、それをも物ともせず、捜し求め続けて行くならば、必ず確信に至るように導いて下さいます。

たとえ、そのために代償を必要としたとしても、御言葉の実践によって得るものは、それ以上に大きいのです。御言葉を実践し、実験する事なしには力のない、頭だけの信仰にとどまってしまいます。私たちの信仰はそうでありたくないと思うのです。



小区分 (2:8~20)
8日 2:17~20 探求心のある信仰

この記事において、羊飼いたちの、実に生き生きとしている様子をルカは描いています。羊飼いたちが、御使いの言葉通りの、飼葉おけに寝かされている乳飲み子イエスを見つけ、この幼な子について語られた御使いの言葉や天の軍勢の様子などを、マリヤとヨセフに、また、町の人々に知らせている様が生き生きと伝わってきます。

羊飼いたちは、御告げを素直に信じ、即、実行に移して

捜し当て、確信の喜びに満たされて帰っていきました。彼らの信仰を一つのものに例えるならば、それは勢いよく流れる川の本流のように、よどむことのない動的な信仰だと言えます。それに反して、頭だけの信仰者たちというのは、川の端の、全く流れのないよどんだ所のような、死んだ信仰だとして、ルカがあたかも対照的に描き出しているのは、その意図を受けとめてほしいと考えていたからでしょう。

なぜ羊飼いたちは、このような動的な信仰を持ち得たのでしょうか。彼ら自身、日々羊を相手にしていた素朴な性質を持った人間であったからでもあったでしょう。また、直接御使いの言葉を聞き、素晴らしい天国合唱団を目の当たりに見たからでもあったでしょう。

しかし、たとえこのような条件が揃っていたとしても、聞いて驚くだけでとどまってしまう人がほとんどではないのでしょうか。けれども、羊飼いたちにはもう一つの別の要因があったと言えます。すなわち彼らには、探求心の強さがあったのです。この点を見逃してはなりません。これが動的信仰の第1の要因なのですから。

探求心のある信仰と、ない信仰とでは、雲泥の差があります。探求心のない信仰は、聞くことは聞いても、そこから一步踏み出すことをしないのです。いつも聞くだけにとどまってしまいます。それ故、喜びに満たされる経験が少なく、信仰経歴がいくら長くなっても、ますます観念的な、頭だけの信仰になっていくのです。

今日においても、日々主に生かされている喜びを持つことができないクリスチャンは、御言葉を聞くだけにとどめて探求心をなくしてしまっているのです。信仰が頭だけのものになっていき、喜びも力も感じ取れなくなってしまっているのでしょう。

探求心のある信仰は、御言葉を聞くだけにとどめておくことをせず、聞いた御言葉を本気で味わおうとします。このように探求心を持ち、御言葉を実践、実験することによって御言葉の力を確信し、神の大なるみわざを拝することができ、喜びに満たされていくのです。

人間にとって、特に信仰において、探求心を持つということが、いかに重要であるかを強く思われます。この探求心が、最終的には神の素晴らしさを知り、偉大なる神への信仰へと結びついていき、神に喜ばれる信仰になっていくのです。

一つの例をあげて考えてみましょう。神に信頼することがいかに大切であるか、このことは聞くだけでは何の役にも立ちません。実際に、あらゆる時に神への信頼を現し、自分のすべてを神にお任せしてみなければ、神に信頼するということが何も分からないのです。そして、神に信頼するということがどのようなことなのか、霊的な体験を通して味わい、神に信頼して歩むことができるということが、どんなに素晴らしい恵みであるかが分かった時、信頼すべき神に、信頼を現したということで、神に栄光を帰したことになるのです。

ここに、もう一つのタイプの信仰者の姿を描いています。それは、マリヤの姿であります。マリヤは羊飼いたちの訪問を通して、御使いの言葉や、天の軍勢の素晴らしい賛美のこと、また、乳飲み子イエスがベツレヘムの家畜小屋の飼葉おけに寝ているということまで、すべて神のご計画であったということ、これら一連の不思議な事柄を、10 か月程前に自分に現れて下さった御使いガブリエルの御告げに重複させて思いめぐらしたのです。

若い母マリヤは瞑想する人でありました。瞑想するとい

うのは、神の御言葉や導きを大切にしたいとの霊における探求心の強さを持って、今この私に何を語りかけて下さっているのか、それを受けとめようとして、静かに神と向き合う時を持つことです。

私たち信仰者にとって必要なのは、羊飼いたちのような、行動を伴う探求心と、マリヤのように、たえず瞑想するという、霊における探求心なのです。これを別の表現で言うならば、霊の飢え渴きだと言えます。神は、飢え渴いて求める者に、応えられずにはおかないお方なのです。イエス様はこう言われました。求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見出すであろう（マタイ7：7）と。これが信仰の基本なのです。



小区分 (2:21~39 宮詣で)
9日 2:21~24 律法の下に生まれたイエス

家畜小屋は、あまり居心地の良い所ではありませんでしたが、出産直後のマリヤの体のために、また、幼な子のためには、家畜小屋でしばらく寝泊まりしなければならなかったことでしょう。婦人が男の子を産んだ時には、7日の間汚れた者と見られるとの律法がありました。（レビ12：

2) そして、定められたとおり8日目に幼な子に割礼を施して、この子が、神との契約関係に入ったことを、儀式をもって示し、その幼な子に命名したのです。もちろん、信仰深いマリヤとヨセフは、天使に告げられた通り、その子をイエスと名付けました。

婦人は7日の後、更に33日間、血のきよめのために家にこもっていることが命じられていました。(レビ12:4) それ故、ヨセフとマリヤは、ここで思わぬ長い滞在をしなければならないことになったのです。もちろん、旅に出る前から、あらかじめ予期していたかもしれませんが…。

こうして、律法に定められてある通りの期間が過ぎると、きよめの儀式と、初子を主に聖別する儀式とを受けるため、ベツレヘムからエルサレム神殿へと向かいました。それは、歩いて2時間程度の所でありました。

これらの記事を見ますと、ヨセフとマリヤは、主の律法に忠実に仕えていた人たちであったことが伺えます。こうして神の子イエスは、律法の中に生まれ、律法の下に置かれたのです。マタイが、福音書の初めに系図を置いて示しているように、神との契約関係にあった民の一人として、イエス様はお生まれになったのです。

イエス様が、生後8日目に律法に従って割礼を受けられたのは、ご自身の意志によったものではありませんが、成長されてから後も、ご自身の意志でもって律法に従ってこられたのです。福音書の各所に記されてありますように、イエス様は律法を否定し、破っておられるかのようにも伺えるのですが、決してそうではありません。

当時の宗教家たちによって、律法が形式化され、無力化されてしまっていたので、律法の精神を明かにするために、あえてそのような行動を取られたのです。そしてはっきり

と語っておられるのです。「わたしが律法や預言者を廃するためきたと思ってはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである」(マタイ5:17)と。(律法や預言者と言う言葉で旧約聖書全体を言い表され、真の律法を守る信仰を表明されています) こうしてイエス様は、律法の下に忠実に生きる者として歩まれたのです。

パウロは、神の子であるイエス様が、律法の下でお生まれになった目的を悟って、次のように語っています。「時の満ちるに及んで、神は御子を女から生まれさせ、律法の下に生まれさせて、おつかわしになった。それは律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった」と。(ガラテヤ4:4, 5)

イエス様が律法の下にお生まれになったのは、律法の呪い(正しい律法に照らし出されると、人間は罪ありと宣言され、滅びるべき者になるという呪いのことです)をまともにお受けになるためにこられたのだと言っています。

すなわち、本来、罪人である私たちが受ける筈の律法の呪いを代わって受けて下さることによって、律法の束縛からあがない出して下さるために、自ら呪いとなって十字架にかかって下さったのです。(ガラテヤ3:13)

それは、私たちに神の子としての身分をプレゼントするために、神は、律法の下に生きる一人の人間としてイエス様を生まれさせられ、呪いを受けさせられたのです。

子供の誕生は、大いなる祝福であり、大いなる喜びである筈です。しかし、イエス様の場合は違っていました。生まれた時から、呪いの十字架が首に掛けられ、一步一步と歩むごとに、成長して行くことが呪いの木に近づくことでありました。何という人生でしょうか。100%他人の人生のために生きた人は、イエス様だけでありました。しかも、

過去、現在、未来に亘るすべての人々を救うために、呪いの十字架を首に掛けながら成長された唯一のお方であったのです。

イエス様が、このような人生を拒まずに歩いて下さったことによって、救われる筈のない罪深いこの私たちが、何と神の子としての身分を頂くことができるようにして下さいましたのです。ただただ感謝と言う他ありません。この恵みの大きさが分からなければ、救いの喜びを知ることはできないでしょう。



小区分 (2:21~39)
10日 2:25, 26 待ち望む信仰

著者ルカは、ここに一つの劇的な出会いを記そうとしています。聖書では神と人、人と人との出会いを大切な事柄として取り扱っているのが分かります。この記事を書くルカの手もはずんだのではないのでしょうか。そんな思いを与えるような、神によって整えられた素晴らしい出会いであ

ると感じるのです。

その劇的な出会いをする人物、シメオンという一信仰者が、どのような人であったかをまず紹介しています。シメオンという名前は、「(神が)聞いて下さった」との意味です。この人は、正しい信仰深い老人であったと言います。この記事以外に、シメオンのことを何一つ知る手立てはありません。けれどもこれで十分だと言えます。

人のことを知るのに、この世の肩書きや功績を知らなくても、その人が、神の御前にどのような人であったのかさえ分かれば十分であります。逆に信仰者が、この世の肩書きや学歴などを全面に出そうとするならば、それの方が問題だと言えます。

信仰者とは、神の御前における一人の人間としての自分を自覚し、神の深い愛を信じ、恐れかしこみつつ神を拝する者であります。神の御前に、この世の肩書きや学歴が一体何になるのでしょうか。ただ神を深く知って、神を信じて喜んでいる人であるかどうかが大変な点であって、信仰を持つ者である私たちが関心を持たなければならないのはこの点だけです。後は付録であって、あってもよし、なくてもよしであります。

このことをはっきりとしていないと、信仰者の群の中に、世的権威、肩書きを持ち込もうとする見当違いな、愚かな世的信仰者が生み出されます。肩書きや学歴などにこだわる人に限って、神の前に生きることをせず、人の前にのみ生きているのです。

少し話が横道にそれましたが、シメオンは正しい信仰深い人であり、神の民であるイスラエルに、メシヤが来てくださって、霊的な救いが実現することを真剣に待ち望んでいた数少ない1人でありました。シメオンが、決して狭い

考えで、イスラエルだけのことを考えて、単なる愛国心だけで待ち望んでいただけではないことが、彼の語った預言（2：29～32）の言葉から分かります。

それだけではなく、シメオンは神よりの一つの特別な啓示を受けていたのです。何とそれは、イスラエルが、いにしえから待ちに待った、神の遣わして下さる救い主に直接出会えるということであって、それまでは決して死なないという、人も羨む特別メニューの啓示でありました。けれども、いくら特別メニューの啓示であっても、それを十分に味わえる人でなければ、豚に真珠でしかありません。

しかし、シメオンはそれを味わうことのできる信仰に生きる人であったのです。その啓示を僅かも疑わず、どこまでも信じ切っていました。2：29の言葉から察するなら、もう死を間近に感じる程の老齢であったと思われます。ひょっとしたら死ぬまでに出会えないのではないだろうかとは疑いませんでした。ただ神から示されたその時を、強い期待を持って待ち望んでいたのです。

待ち望むことを教えられた信仰者は幸いです。人間は、大体甘えの性質を持っており、信仰を持った後も、その甘えに気付かないまま、その甘えを神に向けて、神に甘えようとしている信仰者を見ることが多いのです。だだをこねて神にねだり、その願いが聞かれなかつたりしたら、むくれるという駄々っ子のような姿を現すのです。このような甘えが私たちの内にも以外と潜んでいるものです。

甘えの素は自己中心なのです。この甘えを待って神に向かう時、その信仰は、本末転倒の考え方をするようになり、神を自分の奴隷として、自分の思い通りに幸いを運んでくれる家来として用いようとしてしまうのです。そして、その事に気付こうともしないのです。

このような甘えを待って神に向かうなら、平安と喜びとを得ることができる筈がありません。なぜなら、神は人間にとって甘い父親のように甘えさせて下さるようなお方ではないからです、だから、甘えを待って神に向かうなら、思い通りにならず、不平不満がつのるばかりとなるのです。

私たち信仰を持つ者は、自分の思い通りになることを求めるのではなく、神の御心を求め、神の御心になるようにと向かって行く、神中心の思いを第1にすることが信仰なのだということに気付く必要があります。この信仰に立つために必要とされるのが待ち望むことなのです。

神が、あわれみの思いによって事をなして下さるのを期待し、望みを持ちつつじっと待ち続けることが、神の求めておられることなのです。待ち望む者に対して神は力づけて下さいます。預言者イザヤも、待ち望む者に与えられる神よりの力について、次のように歌っています。「…主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはってのぼることができる…」(イザヤ 40:28~31) と。神がこんな私のことを大事に思い、最もいいように導きと助けとを与えてくださるお方ですから、主が働いてくださることを待ち望むことは、大きな力と励ましになるのです。

私たちもシメオンの如く、信仰を持って、忍耐強く望む姿勢を失わずに歩みたいものです。神はそのような私たちを力づけて下さらない筈がないからです。

小区分 (2:21~39)
11日 2:27,28 聖霊の導き

長い間待ち望んでいたシメオンに、ある日、霊に感じるものがありました。それは単に第6感というようなものではなく、聖霊による導きを感じたのです。今日、その救い主に会うことができるという示しでした。シメオンは聖霊に押し出されるようにして神殿に入って行きました。

シメオンは啓示を受けた時、どのような救い主を想像したのでしょうか。当時の宗敎指導者たちのように、ユダヤの国を、ローマの属国状態から政治的に解放してくれる救い主を待ち望んでいたとは思えないのです。と言うのは、彼は、イスラエルの霊的解放者としての救い主を待ち望んでいたことが分かっているからです。全く検討はずれの期待を持つ指導者が多い中で、ごく少数の、このような正しい預言理解を持つ信仰者を見出すことができるのです。このことは、この当時の事だけではありません。何時の時代においてもそうだと言えます。多くいる宗敎人の中で、ごく少数の眞実な信仰者たちだけが、眞実な福音を正しく後世に伝えていっているのが現実です。

バプテスマ（キリストを救い主として信じ、生涯神と共に生きる決心をした人が受ける、水の中に浸されると言う儀式）を受けてクリスチャンになった人数が、神の眞実な御心を信じた信仰者の数ではありません。ある時イエス様は「招かれる者は多いが選ばれる者は少ない。」（マタイ 22：14）と語っておられるからです。これは多くの人が信仰を持って生きるように招かれているにもかかわらず、本当の信仰を持つように選ばれる人はごくわずかだと言う意味です。信仰を持ってないように難しくしているのではなく、せっかく招かれていても、信仰に生きようとする決心を持つことができる人が少ないと言われているのです。福音を正しく受けとめている眞実な信仰者は、ごく少

数なのです。「命にいたる門は狭く、その道は細い、そしてそれを見出す者が少ない。」(マタイ7:14)

シメオンは、預言を正しく受けとめていたので、靈的解放者(人間を罪の心から解放してくださるお方)である救い主を心に思い描いていました。しかしシメオンは、まさか救い主が乳飲み子であったとは考えもしていなかったのではないのでしょうか。もちろんその事は定かではありませんが、しかし、それにもかかわらずシメオンは、この乳飲み子がそうだと靈に示されると、何一つ躊躇することなく乳飲み子をメシヤだと信じて腕に抱いたのです。ここまで確信してできるというのは、本当に聖靈の導きを信じて歩んでいたとしか言いようがありません。。

今日、特に心に留めたいことは、シメオンと乳飲み子イエスとの劇的な出会いについてであります。人間的な見方によるならば、『シメオンが神殿に入って行った時、そこへたまたま偶然に、乳飲み子を連れた両親が入ってきたのを見て、その時シメオンは、この乳飲み子がメシヤになるのではないかと直感したので、腕に抱いて主をほめたたえた』となります。しかし、聖書記者ルカは、偶然に出会ったとは書きませんでした。御靈の導きによってと記しているのです。偶然と聖靈の導きとはどのように違うのでしょうか。

偶然という言葉を用いる人は、天地万物を創造し、支配しておられる唯一の神の存在を全く考えに入れていない人だと言わなければなりません。ですからその人にとって、すべてのことは偶然に発し、偶然に終るのです。そして、それを一つの型にはめて考えようとするすと、運命論を持ち出すことになり、こうなったのはその人の連命だったからなのだと決め付けるのです。唯一の支配者なる神の存在を考えに入れないなら、これが当然行き着くべき考え方な

のだと言えます。

しかし、神がすべてを導き、一切を支配して下さっているということを信じる信仰者にとって、偶然の出来事というものはひとつもありません。確かに人の目には偶然に見えるようなこともあるでしょう、しかし、すべての事柄の中には聖霊がかかわって下さっており、もっとも適切な導きを与えて下さっていると信じることができるのです。しかし、ここに一つの問題があります。すべてが聖霊の導きであるとするならば、私たちは全く神のあやつり人形のものであって、自由がないのではないかという疑問が起きてきます。

神は、決して私たちをあやつり人形にしようと望んではおられません。私たちが自由意志を持って従うことを、神が望んでおられるということは、聖書を読むならばすぐに分かることです。それでは、聖霊の導きと自由意志とがどのようなかわりを持っているのか、この理解ができていなければなりません。

神を信じた信仰者は、神の御心になるようにと求めます。これを求めない者は信仰者になり切っているとは言えないでしょう。神は聖霊を通して、私たちをすべての点において導いておられます。しかし、私たち信仰者が、自由意志を持って、神の御心が最も正しく、そのお心通りになりますようにと願わなければ、私たちにはその聖霊の導きを見ることができません。なぜなら、自由意志を持って御心になるようにと求める者の上にしか、聖霊はその導きを現されないからなのです。

すなわち、分かりやすく言いますと、聖霊の導きを求める者に対して、聖霊は、その導きが理解できるようにして下さるのです。神は、自由意志を奪っておられるのではあ

りません。この私にとってもっともよい道をいつも提供して下さっている神様の御心を、自由意志を持って、すなわち信仰を持って求めていく時、その導きを見ることができるようにして下さっているのです。

ですから、信仰者にとって偶然の出来事というのは何一つないのです。神の導きがあるからこそ、悪しきこの世において（神の御心に沿って生きる人よりも、はるかに多くの方が神抜きの人生を生きている世界のこと）生きていくことができるのです。もし、すべてのことを偶然として受け取っていかなければならないとしたなら、何と惨めなことでしょうか。その人にとって神は生きておられないことになるからです。

聖霊の導きが間違いなくあるからこそ、神を信じて歩むことができるのです。この導きを信じて受けとめない限り、神を信じ続けることはできません。

神は、シメオンを導いて、約束通りに乳飲み子イエスに出会わせて下さいました。素晴らしい聖霊の導きであります。私たちは、この聖霊の導きを、この私に対しても与えて下さっているとただ信じて歩むしかないので。このお方を信じることによって、将来のことを心配せず、お任せして安心しておることができるのです。

小区分 (2:21~39)
12日 2:29~32
御子イエスを神の子と信じる道

聖霊に導かれて、乳飲み子イエスとの劇的な出会いをすることができた老人シメオンは、感激のあまり、両親の驚くのも構わず、乳飲み子イエスを母マリヤの手から取り上げ、腕に抱いて、“これぞ救い！神よ感謝します”と、年をも忘れて躍り上がったその様子が目に浮かぶようです。

何という美しい信仰の情景でしょうか。長い間信じて待ち望んできた事柄を、今この目ではっきりと確認することができ、周りのものが全く目に入らないで、ただ神のみを見つめている信仰者の姿、これが人間の素朴な、もっとも美しい姿だと言えます。

もちろん、世の事柄を一切見ないようにしなさいという意味ではありません。そこまで、神と神の御心のみ集中できるということが、人間に与えられた最高の美しさを引き出すことになると言いたいのです。この世の事柄に目を奪われやすいこの世に置いて、私たちは、どれだけ真実な事柄に対して集中できるでしょうか。

シメオンにとって、自分の考えによって待ち望んできたものではなく、神に示され、ただ信仰によって待ち望んできた事柄が、ここに実現したのですから、約束を守って下さる神様の真実なお心に、心を打たれない筈はありません。祈りが聞かれるということは、神の真実（神が御言葉をもって約束し、それを実現して下さるといふ真実）に心を打たれることであって、自分の思いを満足させて下さるように、神が働いて下さることではありません。神の御心が実現することなくして何の良いことがあるでしょうか。

乳飲み子イエスを抱いたシメオンは、もう私はこれで安心して死んでいくことができる。何の心残りもない。神に与えられた人生を生きてきて、この世の旅路を心おきなく過させて頂き、ただ神に信頼し続けてきたことが、こんな

にも嬉しく、間違いのない人生であったことに、感慨無量なおももちに浸ったシメオンでありました。老人として、一人の人間として、与えられた人生をここまで喜び踊ることができたというのは、最高の人生を送った人であったということが出来ます。

神に信頼することの喜びを知らずに、無味乾燥な老後を送っている人の多いことを思わされるのです。まして「今の若い者は」と言って、老人であるが故に厄介者扱いされていることを嘆いている老人のことを聞くと、本当にみじめに思われます。

信仰者は、生涯の終わりに至るまで、神に裏切られることがなく、それどころか、かえって日々恵みを増し加えて下さる神に信頼し切って、幸いな日々を送っていくことが出来ます。(Ⅱコリント 4:16)「だから、私たちは落胆しない。たとえ私たちの外なる人(肉の体の事)は滅びても、内なる人(神と共に生きる霊で生きる人の事)は日毎に新しくされる」と言っています。

もちろん、何の問題もない人生を送ることができると言っているわけではありません。シメオンのように、もう安心だ、何時死んでもいい、何の心残りもない。後のことはすべて神様が御心のままに導いて下さる、という思いに至るなら、何と素晴らしいことでしょう。たとえ病気をしても、苦しんでも、ご自身を信頼する者に対しては、最後の最後まで御手を伸べて導いて下さる神が側にいて下さるのですから、こんなに平安な事実は他にありません。

シメオンの素晴らしい生き方だけではなく、彼の信仰告白とも言える、神をほめたたえた言葉を見ておく必要があるでしょう。

シメオンは言いました。「私のこの2つの目で、あなたの

救いを確認しました。」と、乳飲み子イエスを見て、あなたの計画された御救いは、この方のことですよと言っているのです。まだ乳飲み子であり、乳飲み子から心に感動を覚える言葉を聞いたわけでもなく、ただ抱かれていて、自分で歩くことすらできないイエスを見て、このように語ったのですから、驚きです。

公生涯に入られ、神の国が近づいたことを宣べ伝えられたイエス様をさえ、“私の救い”として受け入れた者は少数で、ほとんどいなかったのです。イエス様に従って行った者たちの目にも、奇跡やいやしをなして下さる方、よい教師としてしか写らなかったのです。いつも側にいた弟子たちでさえ、イエス様を“私の救い”として本当の意味で知り得たのは、イエス様の死後、聖霊降臨（イエス様がおられなくなってから、代わりの助け主として信じるすべての人の内に注がれると約束された）の時からであります。まして、乳飲み子のイエスを、この方こそ救いだと言ったシメオンが言い得たのは、聖霊の導きがあったとしか言いようがありません。

シメオンが、乳飲み子イエスを見て“私の救い”と言い得たのは、神が遣わして下さる救い主が、今は幼くても間違いなく“神の子”であることを信じていたからでしょう。公生涯に入られてからのイエス様に対しても同様であります。この方を私の救い、万民の救いと告白できるのは、この方を“神の子”と信じる人だけあります。なぜなら、“神の子”以外に、人を罪より救い得ることができないからです。この方を“神の子”と信じるることができない人々にとっては、イエス様が、成人して素晴らしい人格者であることが明かになったとしても、この方を“私の救い”とは言うことはないでしょう。まして、乳飲み子を見て“私

の救い”と言い得るとは、到底考えられません。

シメオンにとっては、この方が成人であろうと、乳飲み子であろうと、変わりはありませんでした。この方から立派な教えを聞いたり、素晴らしい奇蹟を見たりする必要はありませんでした。なぜなら、この方が“神の子”であり、それ故に、救いのみわざをなして下さるお方であるということ、何の抵抗もなく信じ得たからなのです。

彼が、今自分が死んでも、救いの道から外れてしまうとは思ってはいませんでした。このお方が大きくなって、救いのみわざをなして下さることによって、その救いは実現するのですが、その救いが過去にさかのぼって自分にも及ぶと信じていたのです。だから平安であることができたのです。神のみわざの永遠性（過去、現在、未来に亘る、時間を超越した神性）をどこまで理解していたかは分かりませんが、このお方が神の子であるからという理由で、自分の救いを確信していたのは間違いないでしょう。

イエス様を“神の子”と信じるのが何にもまして最も重要なことであり、この信仰なくして福音に生きることはできません。私たちも、イエス様を、神から遣わされたという点だけで“神の子”であることを信じ、そこにしか救いがないことを確認して歩んでいきたいのです。神は救いの道として、“御子イエスを神の子と信じる道”のみを設けて下さったのですから…。(Iヨハネ4:15)

小区分 (2:21~39)

13日 2:33,34

人類を2分するイエス

著者ルカは、いよいよはっきりと、イエス様の誕生の意義を明かにしようとしています。今までは、イエス様の誕生は、大いなる喜びとして現わされてきました。事実その通りであります。しかし、それがすべてではありません。その影に隠れているもう一つの深い意義を、ルカの霊の目は見ていました。それがシメオンの預言を通して明かにされているのです。

その意義とは、一体どのようなことでしょうか。それは、イエス様の誕生によって人類を2分されるとのことです。どういうことかと言いますと、イエス様がお生まれになったことにより、人々は倒れるか立ち上がるかに分けられ、イエス様ご自身は、反対を受けるしるしとして定められていると言うのです。すなわち、イエス様は救いを待ち望む者にとっては、それを実現してくださる素晴らしいお方なのですが、このお方を拒む者には躓きの石となって、滅びという裁きを受け取ることが決定するということが、この預言の内容なのです。

ペテロも手紙において同じことを語っています。(Ⅰペテロ2：6～8)『見よ、わたしはシオンに、選ばれた尊い石、隅のかしら石を置く、それにより頼む者は、決して、失望に終わることがない』この石は、より頼んでいるあなたがたには尊いものであるが、不信仰な人々には『家造りらの捨てた石で、隅のかしら石となったもの』また『つまずきの石、妨げの岩』である。しかし、彼らがつまずくのは、御言に従わないからであって、彼らは、実は、そうなるようにと定められていたのである」と。これは、信じて受け入れる者にとっては希望に満ちたことでありますが、信じないで受け入れない人にとっては、魂の滅びしかないと行って、恐ろしい結末が待っていると行っているのです。

イエス様が人となってこの地上にこられたことは、ある人たちにとっては喜びの福音となり得るのですが、他の人たちにとっては何と！恐ろしい裁きとなると言うのです。これは、私たち信仰者が福音を伝える時にも経験させられるものです。福音をまだ聞いたことのない人たちにとって、福音を受け入れるか、受け入れないはか、聞いていないので決定しようがありません。しかし、一旦、福音を聞いたならば、その時点で、それを受け入れる人にとっては喜びの福音となりますが、それを受け入れず、拒む人にとっては裁きとしかならないのです。

すなわち、私たちは福音を伝える時、福音と裁きとを携えて行っていることになると言うのです。何という恐ろしい任務でしょうか。これは、イエス様が、人を倒されるか、立ち上がられるかに分けるためにこられたからです。こうしてイエス様がこられたことによって、人々の心にある思いが、はっきりと右にするか左にするか表に現れるようにされると言うのです。

しかも、イエス様は次のようにも言われました。「狭い門からはいれ、滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからは行って行く者が多い。命にいたる門は狭く、その道は細い。そしてそれを見出だす者が少ない」と。イエス様は、立ち上がる者と倒れる者とに分けられるためにこられたのですが、倒れる者の方が多く、立ち上がる者の方が少ないと言われているのです。すなわちイエス様を信じて喜び受け入れる者の方がはるかに少ないと言われているのです。

なぜ神は、すべての人を、もしそうでなくても大多数の人を救いに入れようとはなさらず、少数の者への救いとされたのでしょうか。神が、本当に愛なる神であられるなら

ば、そのようなことはおかしいではないかという人もいます。私自身も大多数の人が救われてほしいと願うのです。

しかしこれは、神の救いが少数の人にだけ提供されるものとして神がお定めになったのではありません。そう受けとめる人の勘違いなのです。神は、本当はすべての人を救いたいとお考えになって、お招きになっておられるのです。しかし、人の心を見抜かれる神は、人間の側で、この招きに喜んで応じるのは少数の人でしかないと知っておられたから、このように語られたのです。神の側にはではなく、神が人となってくださったという喜びの福音を受け入れようとしない人間の側に問題があるのです。そのことが、イエス様を十字架につけるように望んだ大多数の人々の姿に明らかになっています。

少数の人が、イエス様が神の子であられることに反対したのではなく、大多数の者が反対し、罪のないイエス様を十字架につけてしまったのです。この時に、イエス様に従ったのは、ごくわずかの人たちだけでありました。主は（神様やイエス様の事を、創造者であり、力ある神性を持ったお方として、聖書では主と呼ぶようになっていきます）すべての人を拒まれなかったのに、人間の方が主を拒んだのです。これが人間の罪の現実であり、心のかたくなさの現実なのです。いくら素情らしい救いの福音が提示されても、それを受け入れようとしない人々が大多数なのです。

しかし、この救いの福音は、私たちが神の御前に生きる唯一の方法であるということを信じた者にとっては、一方的な神の恵みによって、これまで罪人であった者が、神の子とされ、神の御前に立って、最高の人生を歩むことのできる者として頂いたのです。（ヨハネ 1：12）

それも、私たちにそうされるだけの価値や資格や功績が

あったからではなく、ただ一方的な愛と恵みによってそうして頂けるのです。たとえ少数であったとしても、その恵みにあずかることができる幸いは、言い表すことのできない位大きくて確かなものなのです。

ですから、滅びという裁きが伴っているという厳しさを承知の上で、福音が受け入れられるようにと願いつつ、福音を携えていかずにはおれないのです。たとえ少数の人であっても、受け入れて救われる人がいるのですから、それを期待して携えて行くのです。そしてその人々と共に、救われたことを喜び合うことができるなら、どんなに嬉しいことでしょう。

私たちが福音を自分だけのものにしないで、他の人にもと願って伝える時、今日においても、こうして今は天におられるイエス様は、私たち信仰者を用いて、喜びの福音を聞いて、人を立ち上がらせるか、倒れさせられるか、に分けていかれるのです。



小区分 (2:21~39)
14日 2:35 相反した人生

シメオンは、ヨセフとマリヤが驚き、戸惑っているにも構わないで、赤ちゃんであるイエス様を抱いて、「この子は、人類を2分させるために生まれ、反対を受けるしるしとし

て定められています」と述べた上で、更に驚くべき預言を続け、マリヤの上にも将来起こる苦しみを預言するのです。

剣で胸を刺し貫かれるとは、実際に、このようにして殺されるという意味ではありません。これは比喩的表現で、非常に大きな苦しみに胸を刺し貫かれるほどの経験をするということの意味しているのです。ここで疑問に思うのは、これは、マリヤに対してだけ言われたのであって、ヨセフは含まれてはいません。どうしてマリヤだけに預言されているのでしょうか。

聖書には明確に記されてはいませんが、伝承によれば、ヨセフは、イエスが12才の時から公生涯に入られるまでの間に亡くなったとされていますが、すでにそのことを神は見越して、マリヤの事だけを語っておられるのでしょうか。それとも、子供の苦難の死を目の前にして、心がかきむしられるような思いになるのは、やはり母親だということでマリヤに語られているのでしょうか。どちらにしても、マリヤは大きな苦しみに胸が刺し抜かれると言うのです。

私たち人間は、将来がどのようなになるか分からないから、一面は不安ではありますが、将来が分からないからこそ安穩としておることができるという面もあります。もし、将来必ず大きな苦しみを味わわなければならないということが分かっていたとしたらどうでしょうか。それが分かれると恐れを感じるものです。しかも、恐れを感じさせるために語られたのではなく、必ず実現する神からの預言として語られているのですから、聞き流すことはできません。貧しいながらも、喜びをもって宮詣でにきたマリヤにとって、これは何と厳しい預言でしょうか。それは、将来に希望を持って歩もうとする者に対して、あたかも冷水を浴びせ掛けるかのような預言だったのです。

けれども、マリヤに対する神からの預言は、恐れさせたり、不安にさせたりするために示されたとは思えないのです。なぜなら、マリヤは主に対して不信を現わしていた訳ではありません。それどころか、素直に服従し、神の御前にきよく歩んでいるマリヤを、神が不安にさせようとされる筈がありません。

それでは、一体どうしてこんな預言が語られたのでしょうか。それは、救い主なるイエスの母親になるという、人間の受ける光栄の中でもっとも大きな光栄をマリヤは受けたのですが、その光栄には、大きな苦しみも伴ってくるものだと言うのです。何と相反した人生でしょうか。

非常に大きな苦しみとは、わが子イエスの無残な死に様に会いつつ、助けてやることもできずに、目の前で見ていなければならないという、心を引き裂かれるような母親の立場に置かれることを指しているのだと思われます（ヨハネ 19：25）。誰がこの母親の立場に立って考えることができるでしょうか。

この預言を聞いた時のマリヤも、そのようなことを想像すらできなかつたに違いありません。まして 14, 5 歳前後の彼女に、そのような思いを向けることができる筈もありませんでした。マリヤも、30 数年後、イエス様の十字架の下にたたずんだ時に、この預言が実現したのだというその厳しさを思い浮かべさせられたと思われるのです。

これは、マリヤだけの特別な経験であります。もちろん全く同じ内容だという訳ではありませんが、すべての信仰者も通される厳しさだと示されていると考えられます。

パウロという伝道者は、ピリピ人への手紙においてこう言っています。「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じるだけでなく、彼のために苦しむことを賜って

いる」(1:29)と。私たちは、キリストを信じることによって、ただそれだけで絶大な救いの恵みを頂きました。罪赦され、喜びと感謝に満たされたのです。それは、私たちの頑張りや努力によったものではなく、神からの一方的な恵みによって神の子にして頂いたのです。この素晴らしい祝福は、他のどんなものよりも優れた最高のプレゼントであります。しかし、この素晴らしい祝福にあずかった者は、それと共にキリストのために苦しむことをも賜っているというのです。これは何と相反した人生でしょうか。

人は祝福を求めても、苦しみは求めません。祝福のみを求めるのです。しかし、本当の祝福には、神の深いお考えにより、苦しみも受けつつ歩むように導かれているのです。

この相反する人生が、神の与えて下さった人生なのです。少しでも苦しみがあると、すぐにぐらついたり、信じない方が良かった、信じなかったならこんな苦しみはなかった、と言って失望を覚えたりするなら、本当の祝福を知っていないことになります。

確かに、私たちは弱い者ですから、苦しいことに出会ったりするとぐらつきやすいのです。けれどもその時、神を信じて神と共にある者は、キリストのために苦しむことをも賜っているというお言葉を心に留めて、ますます主によりすがらなければなりません。その苦しみよりも、祝福の方がはるかに大きいものであり、又、その苦しみを通して多くの事を学ばせ、より深い祝福にあずからせようとして下さっている神のお心を無駄にはならないのです。神は意味あって、祝福の道を通されるだけではなく、苦しみの道をも通されるお方だからです。



小区分 (2:21~39)
15日 2:36~39 真実な主のしもべたち

乳飲み子イエスを腕に抱き、「このお方こそ救い」と言って主をほめたたえ、神の預言を語っているシメオンを前にして、ヨセフもマリヤもただあっけにと取られ、目の前に起きている不思議な出来事にきょとんとしていたのでしょう。するとそこへ、その光景を見て、霊に感じたひとりの老女が側にやってきて、救い主をお遣わし下さった神をほめたたえ、神に感謝をささげたのです。

度重なる不思議な出来事に、啞然としたヨセフも、マリヤも、いろいろな思いを胸に去来させずにはおれなかったと思われます。

シメオンについては、その人物の背景について詳しく語られていないのに、アンナについては、不思議とその血統、その生涯の断片、年齢などを書きとめてあります。これは一体なぜなのでしょう。一つ考えられることは、シメオンもアンナも同じように乳飲み子イエスとの出会いをするのですが、シメオンが乳飲み子イエスと出会うことによって示されている意義と、アンナが乳飲み子イエスと出会う

ことによって示されている意義とが異なっていたからだと言えるでしょう。

それでは、アンナについて詳しく記されている意義を見ていくことにいたしましょう。それは一体何でしょうか。まず、血統はアセル族のパヌエルの娘だと言います。これはアンナが育ってきた環境、家庭を示しています。そしてその生涯の断片として娘時代に嫁ぎ、7年の間、夫に仕える生活を送ったことが記されています。ここには子供のことが記されていないので、多分いなかったと考えてもよいでしょう。しかし、その夫が死んで、幸せだった今までの毎日が、一転してどん底に落ち、やもめとなってしまったのです。

夫の死を通して人生のはかなさを感じ、何のために生かされているのだろうかと思案に考えさせられ、そこで、生涯神にのみ仕えようと決心したのです。神を信じ、神を喜び、神との深い交わりに生きることが、私に与えられた使命であり、喜びであると信じて、断食と祈りとをもって神に真剣に仕えていたことが記されています。

夜も昼も、と記しているのは、アンナの信仰が単に、時間を定めてそれを忠実に守っていくというような形式的な信仰ではなくて、形に捉われない命のある信仰であったことを示していると分かります。しかも、それが短期間のことなのではなく、生涯その使命と信仰が揺がず、この時に至るまで仕え続けていたのです。この時に84歳になっていたとありますが、これは原文では、84年やもめであったとも取れる表現なのです。そうであるとするなら、すでに100歳以上になっていたということになります。どちらにしても、老年に至ってもなお、生氣溢れる信仰生活を送っていたことが示されているのです。

うら若き女性が、生涯神に仕えようとするのは、大きな戦いでもあったことでしょう。けれども、いろいろな苦しみを乗り越えて、アンナは、老いてますます信仰に燃やされていた感じが感じられます。このようなアンナが、霊の導きを見逃す筈はなく、シメオンが預言している光景を見て、乳飲み子イエスを救い主だと信じ、約束を成就して下さった真実なる神をほめたたえたのです。

いろいろな境遇を通り抜けてきた一老女の生きた信仰が、霊の導きを見逃さず、乳飲み子イエスとの出会いを経験し得たことを現すために、アンナの人物背景を書き表したものだと思われます。

「この乳飲み子こそ救い」と言うシメオンの信じにくい言葉も、アンナにとってはつまりきにはならなかったのです。30数年経ち、公生涯において偉大なみわざをなされ、権威ある教えを語られたイエス様を目の当たりに見ている、「この方こそ救い」と信じることができなかつた多くの人々がいたのに比べて、シメオンとアンナは、まだ生まれたばかりの何もできない乳飲み子に、救いを見ることができたのです。何という深い信仰でしょうか。イスラエルの隠れた素晴らしい信仰者たちを、ルカはここに紹介しようとしているのです。

老女アンナは、老いてますます燃やされる、命のある信仰に歩んでいたからこそ、神の御心を素直に信じることができたのです。何と素晴らしい事でしょうか。神を信頼し、神を喜び、神との深い交わりに生きて歩み続けるなら、霊は燃え、内なる人（神を感じる霊性の事）は日々新たにされ、命のある信仰に導かれます。又、このような信仰に生きる人は、聖霊の導きを見逃しません。

主のしもべ（神に仕える人生として生きる人の事）とし

て歩むとは、霊の導き（聖霊なる神が、思いの内にひらめかせてくださる導きの事）を見逃さないで、それに従って進んでいくことであります。私たちも、年が進むにつれて、ますます深く信仰に燃やされて行きたいものだと思います。



小区分（2：40～52 イエスの少年時代）
16日 2：40 恵みに応答する信仰

著者ルカは、神の御子イエス誕生にまつわる必要な出来事を書き記して来ました。そしてシメオンの預言をもって、その誕生の意義を示すクライマックスに達しました。こうして場所はエルサレムからガリラヤのナザレへと移ったのです。このナザレにおいてのイエスの幼少年時代が展開されていくと期待して読み進もうとすると、何と、バプテスマのヨハネの時と同じように、たった一言で、「幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みとその上にあった」とだけ書き記されています。

ここにルカが福音書を書こうとしたのは、イエスの伝記を書こうとしたのではないということがはっきりと分かり

まず。彼は、神から託された人間へのよき知らせ、すなわち福音を書き記すことが目的でありましたから、イエスの幼少年時代はこの一言で良かったのです。福音書をよく見ますと、伝記のように見えて、これ程伝記とかけ離れている書物はないと言えます。なぜなら、イエスの生涯の内、記されているのはほとんどが、公生涯として歩まれた3年間程のことであり、しかもその3分の1程は、最後の一週間の十字架への道と、死後のよみがえりのことが記されているのです。こんな、いびつな伝記はどこにもないし、伝記とは到底言えないでしょう。

普通、伝記においては、偉人が偉大な業績をなし遂げたその背景である幼少年時代の神童ぶりが描かれるのですが、ルカは、イエスが救い主であることを示そうとするのに、幼少年時代の神童ぶりを描こうとはしなかったのです。(ただ一つの記事、それは神童ぶりというよりも、神の子としての芽生えともいふべき12才の時のことを記してはいますが…)。

ルカは、イエスが“救い主”であることを示すのに、イエスが“神の子”であったという事実を示しさえすれば、その目的が果たせると考えていたのでした。そのために、御子イエスの誕生の記事を詳しく記してきました。これが、伝記ではなく福音として書き表そうとしたルカの思いであったことがよく分かります。マルコによる福音書は、それすらも必要と考えなかったようで、冒頭に「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」と書いただけで、イエスが神の子であったことは、誕生の時や幼少年時代のことを記さなくても、誰も疑うことの出来ない事実だと言わんばかりに、一言で済ませてしまっています。

福音は、人間的な興味を引くことに何の関心も持っては

いません。もっと、偉人のように描き出してくれることを願う人間の期待を裏切ろうとするかのように、伝えなければならない所だけ書き記そうとするのです。これは4つの福音書に共通することです。これはまた、一般の文学との違いでもあります。それ故、人間的な興味だけでは、誰も福音書を読み進むことはできないのです。

このことを心にとめた上で、ナザレへ帰ってから12才になるまでの成長期を語った一言について、その記されている意味を見てみることにしましょう。幼な子イエスは、肉体的にも成長し、知的にも成長されました。そして、その一つ一つの歩みの上に神の恵みが注がれていた、と記されています。その言葉の中に、信仰を強くされた両親から信仰を学んで育ち、その愛を受けて成長し、田舎における生活の中で、徐々に公生涯への準備がなされていっている様子が感じられるのです。

神の恵みがある上にあつたとは、幼な子が、神の恵みに応答する信仰へと育てられていっていることを示しているように思われます。幼い頃から、純粋な信仰を持つように両親に導かれ、神に信頼を置いて歩むことの大切さを、事あるごとに教えられ、神の恵みを素直に喜んでいくように育てて行った様子が、その言葉の中に感じ取れます。

親が子供に、神に信頼を置いて歩むことの大切さを教えること、これ程大切なことはありません。これが一番重要な育児法だと言えます。これさえできていれば、子供は、神の恵みによって成長させられていくからです。幼い時に持つ信仰は、判断力や決心する力ができあがっていないから、素朴であると言えますし、教えられたことを疑おうとしない姿は尊いものだと言えます。

まして少年イエスは、霊的な感覚が鋭く（2：46，47）

両親に学び、村の会堂で学び、神に対する知識に目ざめ、少年ながらも純粋な、真実な信仰者へと育てていったと想像することができます。それは、神の恵みに応答する信仰者へと育てていったということであります。

どのような子供も、神の恵みに応答する信仰へと育てられて行くなら、神はご自身の子供を育てられるように、一つ一つの歩みの上に、その子供を生かすために必要な恵みと訓練と愛とを注いで導いて下さいます。子供を神様に育てて頂くように、神様にお任せすること、そこに子供のもっとも幸いな成長が見られると言う事を知らなければなりません。



小区分 (2:40~52)
17日 2:41~47 少年イエスの賢さ

ヨセフとマリヤとは、それから後も、純粋な信仰を持って歩んだことでしょう。そのような信仰深い両親にはぐくまれて育てていった少年イエスでありました。両親は、律法に定められている通り、毎年過ぎ越しの祭りの時には、礼拝するためにエルサレムへ上って行きました。律法を正

しく守ろうとしている敬虔な一ユダヤ人の姿が、そこに描かれているのです。

そして、唯一、少年時代のイエスについて記されているのは、12 才になった時の一つのエピソードだけが記されています。12 才の時、両親についてエルサレムに上りました。ある人は、この時が少年イエスにとって、初めてのエルサレム上りではなく、今までもしばしばについて行ったのではないか見ています。あるいはそうかもしれません。どちらにせよ、少年イエスにとって、このエルサレム上りは、非常に楽しみな、期待に満ちたものであったに違いありません。もうこの頃では、少年イエスは体も心もしっかりとしてきたし、何にもまして、霊的な感覚が非常に鋭くなってきていました。

このエルサレム上りは、大人から見れば、両親の言うことを聞かず、ハメを外した行動をしたイエスの迷子事件でありましたが、少年イエスが神の子であることを自覚される、驚くべきひらめきを見せる重要な事件となったのです。

長旅ではありましたが、目的はエルサレムでの礼拝であり、しかもこの一家だけが行くのではなく、同じエルサレム上りをする同信の人達と道連れとなり、一団となっていくのですから、疲れることもなく、神を讃美しつつ旅をすることができたようです。

詩篇に、“都もうでの歌”というのがあります（詩篇 120 篇から 134 篇まで）。これらの歌を歌いつつ、主を称えて旅をしている美しい光景が思い描けます。一緒について行ったであろう少年たちも、このような信仰者としての親の姿を通して信仰を学び取っていったのです。子供が親から学ぶもっとも尊いものは、親が真剣に神に向かい、神をあがめている時の姿だと言えます。言葉も何もありません。

神に真剣に向っているなら、子供の心は純粋な何かを感じ取っていくものです。過越祭りには、約50万人の巡礼者で一杯に溢れたそうです。それは、壮大な光景であったに違いありません。

この祭りも終り、帰ることになりましたが、ヨセフとマリヤは、少年イエスと離れ離れとなっていました。巡礼者の旅は、大人は大人、子供は子供と分かれて一団となっていたのでしょう。帰り道も、大人と子供と別々の一団となって引き上げているので、イエスもその中にいるものと思ひ込んで帰途についたのです。

その日の夕方、宿屋に泊まる段になって、イエスを捜してみたがどこにも見当たらず、慌てて捜し捜しエルサレムへと引き返して行ったのです。

そのような両親の心配をよそに、少年イエスは、持っていた幾つかの疑問を、本場の教師たちに尋ねてみようと思ち構えていたのでしょう。そのような機会ができると、それに熱中してしまい、両親に、帰る日を教えられていた筈ですが、4日過ぎても気が付かない程に、話しを聞いたり、質問したりしていたのです。何と言う探求心でしょうか。

純粋な心と深い探求心を持って迫られると、さすがの本場の教師たちもたじたじとなっていたのです。口だけの教師、知識だけの教師は、純真な信仰と深い探求心を持った少年の質問に、冷汗をかかされるものです。まして靈的な感覚が人一倍鋭くなっていた少年イエスは、通り一遍の説明では引き下がらなかったと思われれます。この問答を聞いていた人々は、この少年の賢さに舌を巻いたのです。

純粋な心と深い探求心、これが少年イエスの特徴でありました。これは又、信仰者の特徴でなければならぬと言えます。ともすれば口先だけ、知識だけ、形だけの信仰者

になりやすい傾向を、私たちは見させられています。私たちはそうであってはなりません。見えない神と直接向き合い、神から流れてくる力強い命を受け続け、神の深い御心を味わい、感謝の思いに溢れている向かい方ができる信仰者となっていなければ意味のない信仰で終わるでしょう。

生涯、神と向き合い続ける純粋な心と深い探求心とを持って向っているなら、神は驚くべき御力を持って、必ず応えて下さいます。「求めよ、そうすれば与えられるであろう」。このイエス様のお言葉は、ご自身の少年時代の姿そのものであったのです。純粋な心と深い探求心のない信仰者は、冷汗のかかされる生涯を送らなければならないでしょう。



小区分 (2:40~52)
18日 2:48~50 天の父よ

自分たちの最愛の子イエスが、道に迷ってオロオロしているのではないかと思うと哀れになって、ヨセフとマリヤは必死に捜し回りながらエルサレムの方に引き返して行ったのです。1日で歩く道のりを、あちらこちらと3日もかけて捜し回ったのです。にもかかわらず一体どこに迷い込

んだのか、食べるものも食べないで倒れているのではないだろうか。どこかで怪我をしてうずくまっているのではないだろうか。途中で獣に襲われたりしてはいないだろうか。いろいろなことを考えると、ヨセフもマリヤも気が気ではありませんでした。

とうとう見つからないままエルサレムについてしまったのです。最後の望みを託して、エルサレム中を捜し回りました。すると、何と神殿の中で教師たちの真ん中に座って話しを聞いたり、質問したりしているイエスの姿を見つけたのです。

心配し過ぎて疲労がどっと出てきそうでありましたが、何にしても無事で良かったとホッとしました。そう思いつつイエスに近寄って、「帰る日を言ってあったのに、あなたはまだここにいたのですか。私たちはあなたに何かがあったのではないかと心配して、今まで捜し続けてきたのですよ」と母親が怒るのも当然です。教育のためにも、ちゃんと言って聞かせる必要があったからです。

しかし、少年イエスの口からあやまる言葉が出てくるのかと思えば、「どうして私を捜されたのですか。私が父の家にいる筈だということを知っている筈ではありませんか」と言ったのです。私のいる所は父の下しかありませんのに、どうして捜し回られたりしたのですかと、逆に不思議がっているのです。今までは、私たち両親の言葉に対して反抗することなどなかったのに、子供の口からこんな言葉が出てきたので、マリヤとヨセフとは啞然としてしまいました。イエスの言葉を理解することができなかったのです。しかし、今や霊の目が開かれた少年イエスにとっては、父の御許にいることは当然のことであり、その他どこにも行く所など有り得ないのに、どうしてそれを理解してくれな

いのかと思ったのです。

少年イエスは、小さい頃から、神の子でありつつ、人間の子供として、信仰深い両親の下で神様のことをよく聞き、よく学び、素直に信じてきたのです。そんな中で、神の御子として自意識が少しずつ芽生えてきたのでしょうか。

子供の頃から、もっとも大事なこととして教えられてきたことは、シエマと呼ばれる、申命記 6：4～9 のお言葉で、ユダヤ人は、朝夕ごとに唱えていました。少年イエスも、このシエマをたえず唱えてきたのではないのでしょうか。唯一なる神様を、全身全霊をもって愛するように。しかし少年イエスにとっては、唯一の主なる神様が、人々と感じていたのと同じように、遠い存在のように思えなくなってきていました。

公生涯においてイエス様は、申命記のお言葉をよく引用されました。それは、小さい頃から申命記に親しんでこられたからであったことは言うまでもないことでしょう。その申命記の中に（32：6）「主はあなたを生み、あなたを造り、あなたを堅く立てられたあなたの父でないか」との御言葉から、これをメシヤ預言の一つと捉え、神様を天の父として感じ取られ、ご自身が神の子であることが少しずつ明確にされてこられていたのでしょうか。

少年イエスは、ヨセフを父として尊敬しながらも、神様こそ、この私の本当の父なんだと受け取るようになってきたこの時に、このような事件となり、捜し回った両親に対して、反射的に答えた言葉であったにもかかわらず、「どうして自分の父の家にいる」ことが分からなかったのですか、と言われたのです。

こうして、少年の頃から煮詰められた思いが、公生涯に入る時まで、動くことのない明確なものとしていった

のです。こうして公生涯に入られたイエス様は、神様をご自分の父と受けとめられるだけでなく、ご自分を信じる者にも、“天の父よ”と祈るように教えて下さったのです。(マタイ6:9)

私たちが、神を父よと呼ぶことができるのは、本物の唯一の子であるイエス様が、間に入って下さることによって始めて可能になるのです。すなわち、キリストのあがないのみわざ(私たち人間の罪を赦すために、ご自身の命を犠牲にして死んでくださったこと)がなされることによって、罪深いこんな汚れた私たちでさえ、そのまま、ただキリストを私の救い主と信じるだけで、神を父よと呼べる関係に回復して下さったのです。この恵みの大きさを、私たちは小さく見てはなりません。

こんな崇高な父なる神様を、いつも私たちの側にいて、私たちが愛し守って下さる父として受けとめ、父よと呼べば、いつでも答えて下さるお方がいて下さるのだと思えるようになったのです。これはすごい恵みです。神と私たちを、このような深い愛の関係に回復して下さることが、キリストの来臨の目的であったのですから。

この少年イエスの内に芽生えてきた神の子としての意識が、私たち信仰者が、神を父よと呼べる恵みの時の近いことを匂わされていると感じられるのです。神を、父よと抵抗なく呼ばせて頂けることの幸いを受けとめないで、父よと祈るべきではないでしょう。私たちがどんなにみじめであっても、それを知り尽くした上で、キリストを信じたという一点だけを見て下さり、それによって子として受け入れてくださった神様の御思いを頼りとして歩む私たちが、父よと呼んで祈り、すがってくるのを、神は待って下さっているのです。このように呼びかけることができるだけで

も、信仰者はもっとも祝福されていると言えるのです。



小区分 (2:40~52)
19日 2:51,52
愛されることを学んでいく人生

著者ルカが、イエス様の少年時代のエピソードに目を留め、これを書き記したのは、イエス様が少年の頃、神を父と感じ始められた顕著な事実がそこに見られたからです。神を父よと言い得る事ができるのは、このお方だけでありました。そしてこのお方を信じることによって。このお方を通してのみ私たちも、“父よ”とすることができるようにして頂いたのです。

「天の父よ」と祈るようにと弟子たちに教えられたイエス様のお心と、少年イエスのエピソードとを、著者ルカは交錯させて思い浮かべていたのではないのでしょうか。すでにここに神の子としてのひらめきが見られるからです。

この時から少年イエスは、奮然と立ち上がって神童、もしくは天才少年として世の人々に現していかれたのでしょうか。そうではありませんでした。少年イエスの心の中に、まだ神の子としての意識が芽生えてきたという程度だったからです。少年イエス自身、そのことを感じ取っておられたのでしょうか。まだ時は至らず、その時だけのこととして、その後両親の言葉に従ってナザレの家へと帰っていき、従順な子供として、これまでと少しも変わることなく、両親に孝養を尽くされたのです。言わば、この時からが、公生涯に至るまでの間が、準備期間だったと言えます。その期間を両親に仕えるという形で備えられたのです。

イエスの母親であるマリヤから見て、少年時代のイエスに変化が見られたのは、特にこの事だけだったのでしょうか。それ以外は、理解できない行動はなく、とてもやさしい孝行息子であり、信仰深い子であり、他の子供達と何ら変わりのない子として写っていたのでしょうか。著者ルカが、大事なエピソードとして残そうと考え、母親マリヤから聞いた所、これ以外、特に目立って変わった所はなかったのでしょうか。ルカにとっても、イエスの、神の子としての意識の芽生えを記すのに、これだけで十分だったのでしょうか。

生まれてまもなく、ナザレに住んでから、12才までのことを、一言でその成長期について述べたように、12才のエピソードを記してナザレへ帰られると、公生涯に歩み出される30数才に至るまでの少年、青年期の成長を一言で言い表しています。それは、著者ルカの目が、救い主イエス・キリストに向けられており、福音だけが彼の心を占めていたから、それで十分だったのです。

この少年、青年期の中に、神の子としての意識が明確にされていき、聖書に親しまれ、“父よ”と呼びかけてよく祈

られたことでしょう。イエス様の知恵に満ちた教えや祈りの習慣などが、この時期に形造られていったのです。信仰的思索の好きな青年であったことでしょう。しかし、この時期の彼のもっとも特徴ある姿は、神と人から愛される人であったと言うことでした。

愛されることを学んでいく人生とは、それは、まず信仰が、神に愛され、神の恵みを受けていくことに他ならないということに気付いて、神に自分のすべてをお任せしていくことだと悟ることです。

ともすれば、全力で神を愛し、神に仕えよとの勧めから信仰に入っていくと、信仰は律法となり、重荷となって、いのちが失われるのです。まず神に愛されることを学び、それを喜び感謝していく、これが信仰の道なのです。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛して下さって、私たちの罪のためにあがないの供え物として御子をお遣わしになった。ここに愛がある」と言われている通りです。

(1ヨハネ4：10)

神に愛されることを学ばない者は、神を真に知ることはできません。神に愛されることを学んだ者は、人に愛されることをも学んでいきます。こうして始めて、神を愛し、人を愛して生きる最高の生き方ができるようにして下さるのです。

青年イエスは、従順な人として、神と人から愛されることを学んでいったのです。そして、もっとも深く神を愛する者、人を愛する者になっていかれたのです。イエス様の深い愛の教えを聞く時、愛されることを十分味わってこられ、又、愛してこられたお方であることが感じられるのです。もしそうでなければイエス様の愛についての教えは偽りだと言えるでしょう。

本気で、こんな私のことを大事に思っ下さるお方がいるということを知ることのできない人は多いのです。これ程寂しい人生はありません。私たちは、私たちを大事に思っ下さるお方の、計り知れない程の大きな愛に気づき、愛されていること的事实を心から喜び、楽しみ、ますます愛されていくことを学び取っていくことが、積極的な生き方なのだとということを知る必要があるのです。



小区分 (3:1~14 ヨハネの宣教)
20日 3:1, 2 ヨハネの宣教開始

いよいよ、福音が実現する時代へと著者ルカの筆は進められて行きます。イエス様の公生涯はどのように展開していくのか、興味津々であります。しかし、直接イエス様の公生涯の話に入っていく前に、ここでどうしても紹介すべき一人の人物がいました。それは、先駆者バプテスマのヨハネのことです。

彼は、旧約と新約とをつなぐ、ただ一人の大切な役割を持って遣わされた人であり、イエス様の道備えとして立てられた存在ですから、どうしても欠かすことのできない人物でありました。

彼については、この3章と、あとわずかな箇所に記されているだけでありますが、神によって与えられていた彼の使命は、非常に重要で大きいものでありました。それというのも、ヨハネが遣わされる以前は、おおよそ400年もの間、神は預言者を起されなくて、全く沈黙しておられた時を持たれたからです。

人々は、神の言葉を待ち望んでいました。時が満ちたので、神はヨハネを人々の前に出現させられました。神はヨハネに「さあ、舞台は整った、お前の出番だよ」と、神に押し出されるようにして人々の前に現れました。そしてヨハネは、人々に向かって大声で「悔い改めよ、天国は近づいた」と宣言したのです。

このヨハネの第1声が、旧約の終りの合図であり、又新約の時代の始まりの合図となるのですから、ルカは、それが何時の事であるのか、どのような背景であったのか、詳しく書き記しています。しかし、今日において、それが何年何月何日のことであったのか、多くの説があって、正確にはよく分かりません。多分、AD26年か27年であったと言われていています。たとえ1、2年のずれがあったとしても、そんなに問題はないでしょう。大体の年代を頭にとどめておけばよいと思います。

ヨハネは、神の示される時が来るまで荒野で待機をしていました。当時の人々の脳裏には、祭司ザカリヤの子ヨハネの存在は、人々の前から消えていたので、すでに忘れ去られてしまっていたのです。けれども神にとっては、ヨハネはご自身のご計画を進めていくためには、なくてはならない大事な存在でありました。人々から期待されて用いられる存在なのではなく、神が用いようと選ばれた存在だったのです。

神にのみ覚えられていたヨハネが、神に押し出されて人々に前に立ったのです。彼は自分の考えで、自分の能力を信じて、人々の前に立って叫んだのではありませんでした。神によって立てられ、神に押し出されて神に導かれるまま、神に自分のすべてをお任せして、人々の前に立ったのです。

使徒パウロは、自分のことを使徒と認めようとしないう人々に対して、「人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神によって立てられた使徒パウロ」（ガラテヤ 1：1）と言っています。

これは、人間の定めた権威筋からの承認がなければ使徒ではないと考えていた人々に対して、この私が使徒として立っているのは、人間の権威筋から承認されたものではないし、人間の考えによったものではなく、また、自分の思い込みによって使徒だと言っているのではありません。神がこの私を使徒として立てて下さり、人々に遣わされたのです、と強い確信を持って語っているのです。

今日のキリスト教会において、伝道者は、ともすれば教団や教派が認めている神学校を卒業し、良い成績を修めて聖書の学問的知識と儀式を無難にこなせる技術とを備えた者と、教団や教派から認められて、始めて伝道者として認められています。そこには、その人が神によって選び出され、立てられたと確信し、神によって育てられたかどうかは全く考えられてはおらず、神からの召命によらない職業的伝道者が多く作り出されているのです。

ある伝道者などは、イエス・キリストが現実に復活されたことすら信じてはおらず、霊的な意味で、心の中に復活したなどと考えて、キリスト教を歪めてしまっています。

これで一体何を宣べ伝えるのでしょうか。ただ神学校で定められている規定の単位をクリアしたと言うだけで、その神学校から卒業証書をもって、伝道者として認められているだけで、神から召命されたものではありません。

信仰者はその人を牧師とし、その人から神の言葉を聞くようにされているのです。もちろんその人からは、神の言葉を聞くことはできず、ただその人の聖書知識と思い込みによる人間的感想を聞くだけなのです。これは何と恐ろしいことでしょうか。キリスト教が地に落とされてしまっているのです。これでは、全くの人間的な宗教に墮落してしまっているといしか言いようがありません。

神は、預言者エレミヤを通してこう言われています。「多くの牧者たちは、わたしのぶどう畑を滅ぼし、わたしの地を踏み荒らした。わたしの美しい地を荒れた野にした」と。これは、神が立てた牧者ではなく、人間によって立てた偽牧者によって、主がせつかく造り出された信仰者というぶどう畑が滅ぼされてしまったと語られているのです。

サタンという恐ろしい霊的な存在は、牧者を崩すことによって、キリスト教を崩せると考えて働き掛けているのです。ゼカリヤ書 13：7 でこう語られていることからも分かります。「万軍の主は言われる、『つるぎよ、立ち上がってわが牧者を攻めよ。わたしの次に立つ人を攻めよ。牧者を撃て、その羊は散る。』」牧者（牧師）を攻めれば、すなわち、偽牧者（人間的な牧師）に引き落とすならば、牧者が育てている羊（信仰者）は、正しい信仰を持つことはできなくなり、散らすことができると言っているのです。

ここで、バプテスマのヨハネの話に戻しましょう。彼は、ユダヤ教の権威筋から承認されたものではありませんでした。その人たちの下で育ったのではなく、荒野において、ただ

神によってのみ育てられたからです。そして、神によってのみ承認され、立てられたのです。彼はこの事実により、神のお言葉を語る事ができたのです。

伝道者、牧師は、神によって立てられたとの確信を持って立っていないなら、真の伝道者とは言えません。真の伝道者でないならば、聖書知識を人間の知恵によって語ることはできても、神の言葉を神の知恵によっては語れないし、そこに神が働かれる筈もないのです。

このことは、伝道者にとってだけ意味のある事ではありません。私たちは、みんなが専従伝道者なのではないからです。しかし私たち一人一人は、神によって立てられた証人（神の目撃者、福音の真実の目撃者）という伝道者であると言えます。牧師や役員に承認されたから信仰者なのではなく、直接神によって選び出され、神が救って下さり、神がこの私を信仰者にしてしまわれたと確信し、神からの承認を頂いたと確信していなければ、真の証人とは言えないでしょう。

神はある時、「さあお前の出番だよ」と言われる時があるのです。その時に神からの言葉を、導かれるままに語っていくようにされるのです。それが、神によって選び出されたキリストの証人のあり方なのです。



小区分 (3:1~14)
21日 3:3 悔い改めのバプテスマ

バプテスマのヨハネは、人によらず、ただ神によって預言者として立てられました。しかも、今までの預言者以上の預言者として、最高の任務を受けて（ルカ7:28）、この時代の人々に遣わされたのでした。この時のヨハネの身なりは、マタイ3:4に記されていますが、らくだの毛ごろもを着物とし、腰には皮の帯をしめ、食物はいなごと野蜜とでありました。それは、荒野で修行を積んでいる時のそのままの姿でありました。そしてそれが、預言者の代表的な人物であったエリヤの姿でもあったのです。

「人々は、この私の言葉を聞くだらうか」などと、バプテスマのヨハネは、全く心配などはしませんでした。たとえ、もし一人も聞こうとしなくても、彼の使命は、声を大にして悔い改めるように叫ぶことにあったからです。たとえ誰一人聞こうとしなかったとしても、神がその言葉を聞いてうなずいて下さる筈だと信じて疑わなかったのです。

預言者は、いつの時代でもそうでありました。人々に向かって語りかけるのですが、人々が喜んで聞くとは限りませんでした。いやかえって語れば語るほど嫌がられ、迫害された預言者もいたのです。しかし預言者の言葉は、空しく地に落ちることはありません。もし人が拒んだとしても、それにはかわりなく、預言は、実現なされる神のご意志なのですから地に落ちることはありません。なぜなら、神が真実だと証明され、その通りに実現なされることだからです。

ヨハネは、これまでの長い修行の間、ずっと祈りつつそ

の時を待ち望んできました。そして、神の召命の時がくれば、人々に何を語り伝えなければならないのか、たえず瞑想し、神からの示しを求め続けてきたのです。

救い主がおいでになる前の先駆けとして、人々に準備させなければならないことは、それは、人々の心が、世の方（人間的な興味の方）に向いてしまっているのです。それを神の方に向き変えさせ、神が遣わされる王がこられるのを待ち望む心を起こさせるための、悔い改めのバプテスマを授けることなのだとの確信するようになっていったのです。

彼は、神の「行きなさい」という声を聞いて、導かれるままに、ヨルダン川沿いにある全地方に行き巡って、神が約束して下さっている素晴らしい神の救いを見るためには、今、すべての人は、心を神にのみ向ける悔い改めをしなければならないこと、悔い改めたことを明かにするしるしとして、バプテスマを受ける必要があることを、大声で説き始めたのです。

都会ではなく、田舎の川沿いにおいて語り始めた、このヨハネの言葉に、人々は耳を傾けたのです。なぜなら、その語る言葉には、強い説得力があったからです。それを聞いて人々は思ったのです。私たちは、心を世の方に向け過ぎていた、今神の方にのみ思いを向けなければ、神が約束してくださっている救いを見ることはできないとの言葉に、心に強い迫りを感じ取ったのです。

又、このことを聞いた人々が、周りの人々にどんどんと伝わって行き、ヨハネの話しを聞こうとして非常に多くの人々がヨハネのいる所にまでやってきたのです。こうしてヨハネが現われ、悔い改めのバプテスマについて語り、バプテスマを施しているのを知らない人は、誰一人としていない程になったのです。

ヨハネはどれ程の期間、人々に伝え続けたのか。これだけの記事では全く分かりませんが、数週間あるいは数か月間宣べ伝え続けていたと推測できます。

それでは、ヨハネが伝えた悔い改めのバプテスマとは一体何だったのでしょうか。“罪のゆるしを得させる”という言葉がそこに付け加えられていますから、それをも合わせて考えてみますと、よく理解ができます。しかしともすれば、「悔い改めのバプテスマ」というと、バプテスマを受けさえすれば罪のゆるしが頂けるかのように受け取れます。

しかしこれは、そのような意味なのではありません。ヨハネの教えた悔い改めのバプテスマは、罪のゆるしを目的としていることは間違いがないのですが、罪のゆるしを与えるそのものではなかったのです。ヨハネはそのことを十分に知っていました。私の目的は、人々を、罪のゆるしを得させることのできるお方に引き合わせることでありと理解していたのです。

それでは、それは一体どういう意味なののでしょうか。ヨハネが考え続けていたことは、神から心が離れて、世のこと、自分のことにのみ心を置くようになってしまっている人々の心を、神の方に向き変わらせることにあったのです。これが、ヨハネの悔い改めなのです。「あなたがたが、これまで神から心が離れてしまっていたという恐ろしい罪の姿を悔い改めて、神の方に向き変わるなら、神はそれをゆるし、罪のゆるしを頂ける道へと歩ませて下さる」と、ヨハネは叫んだのです。

悔い改めとは、180度向き変って、罪のゆるしを頂く道へと一歩踏み出したということなのです。こうして悔い改めを通して、罪のゆるしを与えて下さるお方、救い主なるキリストに出会えるようにして下さっているのです。

悔い改めとは、神から離れていた今までの自分の生き方、考え方を全面的に否定することなのです。決して、一部分だけ否定して終わらせてはなりません。それは、単なるごまかしにしかすぎません。全部否定することによって、神が与えて下さる全く新しい生き方が、罪のゆるしという形で頂けるのです。

しかし、全面否定をしないならば、一部分だけ修正されたとしても、それは新しい生き方とはならず、悔い改めたことにはならないのです。すなわち、悔い改めのバプテスマとは、これまでの生き方、考え方を全面否定し、180度向き変り、古い自分が死ぬということを「浸す（バプテスマ）」という形式をもって表現したものなのです。

私たちは今も、古い自分の全面否定という悔い改めを通らされています。信仰を持った今も、古い自分の全面否定を完成して行くように導かれています。それは罪のゆるしを得て、新しい者とされたという霊的な事実の完成を受けとめていくためなのです。



小区分 (3:1~14)
22日 3:4~6 2段構えの救い

思いが 180 度向き変えられて、神の方に向かい、罪のゆるしへと一歩踏み出すようにと、悔い改めのバプテスマの必要性を宣べ伝えたヨハネであったことを見てきました。このヨハネが、神のご計画の中でどのような役割を果たしているのか、著者ルカは、それがイザヤ書に預言されている預言の成就と見て、それを引用し、その預言の中にその役割が示されていることを明かにしました。

それは、イザヤ書 40 章 3～5 節の言葉でありました。この預言は、「慰めよ、わが民を慰めよ」に始まる、神からの慰めのメッセージの冒頭に出てくる言葉であります。補囚の民（神に聞き従わなくなったイスラエルの民は、やがて国が滅ぼされ、敵国に囚われ、奴隷とされてしまうという罰を受けることを指しています）にされてしまうという、その不信の結果の罰を受けようとするイスラエルの民の惨めな様をあらかじめ予見し、その民の服役としての補囚の期間が終わる時まで予見され、その時に語られる神の言葉が、すでに預言者イザヤを通して、預言として、慰めのメッセージが語られているのです。

神は、ご自分が選ばれた民を愛しておられたので、その民の不信が頂点に達するに及んで、愛の鞭（不信に対する罰＝補囚）を当てて、不信の愚かさに気付かせ、信仰に立つ者へと回復するように、その民を導こうとされたのです。

そればかりではなく、その不信の罰を受けた民に対して、その先に、真の慰めを用意しておられることが併せて語られているのです。単に憎いから罰を与えて苦しめてやろうというのではなく、愛しておられたからこそお与えになった罰であることに気付かせようとしたのです。

この預言は、この時代の人々にだけ語られているのではなく、終末の時代（メシヤ来臨後の時代、すなわち、イエ

ス様がこの地上に来られた時から、世が終わる時までの時代を指す)の預言としても語られていたのです。神は、この当時の歴史の一場面(補囚)を通して、終りの時代に示そうとしておられる予型(後に起きる出来事の型)として示されているのです。

すべての人間は罪を犯し、神に対する不信を現したために、もろもろの罪のための刑罰を神から受けなければならぬ者となったのです。その結果、人間は神の目から見れば、耐えられない、激しい怒りを下さずにはおれない、そんな怒りの子と呼ばれるような姿としてしか映ってはいなかったのです。

神の怒りを受けた人間が、どんなにみじめな存在であるかを、パウロはローマ書 1:18~32 で語っています。特に 24 節に「神は彼らが心の欲情にかられ、自分のからだを互いにはずかしめて汚すままに任された」とあります。26 節と 28 節にも同じ言葉が語られています。これは神に見離され、放置されたという、もっともみじめな人間の様であることが描かれているのです。

しかし、勘違いしてはならないことは、神は、人間を滅ぼしたいために怒られたのではなく、愛するが故に見離されたのです。何と人知を越えた愛でしょうか。この愛の故に、刑罰(神の怒り)を受けた者に対して慰めのメッセージ(福音)が用意されているのです。

すなわち、神の怒りを受けた者たちが、みな神の救いを見ることができるよう(6節)と言うのです。このために、まず主の道を備える者が遣わされて、その道筋がまっすぐにされ、平らにされ、ならされると預言されています。

ヨハネ 1:23 では、ヨハネ自身が「わたしは主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばれる者の声だ」と言いました。

実に 700 年程も前に、預言者イザヤを通して、すでにヨハネのことが、神のご計画に沿って遣わされると語られており、明確にされていたとは何と驚くべきことでしょうか。

このように見れば、ヨハネに与えられていた役割がいかに大きなものであったかがよく分かります。旧約聖書の内容は、すべて約束されていたキリストに向かって進められています。そしてヨハネは、このキリストの先駆者として、キリストとセットで扱われて預言されてきたのです。この至れり尽くせりの神の救いのご計画を思う特、何とかして私たち一人一人の魂を、一人でも多くご自身のもとへ引き寄せ、救い上げて、幸いな人生を歩ませようとお考え下さっている神の愛の大きさを感じずにはおれません。

神は愛の故に、罪ある私たちを、まず怒りの子としてのみじめな様を明らかにし、次に真の慰めを与えて、喜びの子とすることを明らかにして下さっています。神のご計画は全く素晴らしく、愛に満ちているという他ありません。確かに、神が厳しく感じられる時があります。これは、私たちも経験してきています。しかし、それは私たちを正しい道筋に戻すために、愛の鞭を当てておられるのです。確かに愛の鞭はあまりうれしいものではありません。ない方がいいのですが、しかし、愛の鞭が当てられない限り、気づこうとしない愚かさ、罪深さ、不信仰さを、私たちは内側に持っているのです。

神は、私たちに愛の鞭を当てようとするのが目的なのではなく、私たちが信仰に立ち返り、神の慰めと恵みの大きさに気づき、それを喜び、感謝する者にならせたいと考えておられるのです。これが神の目的なのです。そのために私たちに、みじめな怒りの子としての姿を明らかにし、その不信仰のまま歩むことの愚かさを示します。そして、

そのことに気づいた者に準備されている慰めの道、赦しの道を歩むことができるように、2段構えの救いの道を用意して、私たちに臨んで下さったのです。何という奥深い恵みでしょうか。



小区分 (3:1~14)
23日 3:7~9 固定観念を捨てる

荒野で呼ぶ声として、ヨハネは熱心に悔い改めとそのバプテスマの必要なことを人々に伝えました。その声は、いなずまが天のはしからはしへとひらめき渡るように、人々の心を貫き、人から人へと伝わり、すべての人がその声を聞くことになったのです。そして、その言葉に心を刺された人々は非常に多く、ぞくぞくとヨハネの下にやってきたのです。

バプテスマのヨハネの宣教は、大成功でありました。宣教した結果、集まってきたすべての人々に、ヨハネはバプテスマを授けることによって、神から頂いた権威を明かにするかと思えば、何と、バプテスマを受けようとして出て

きた群衆に、「まむしの子らよ」と大口上で切り出したので、すから驚きです。このように言われるなどと誰が想像したのでしょうか。

ヨハネは、自分の宣教が成功したのを喜んでいたのではありませんでした。やはり、ヨハネは自分の実績を示して、名声を得ていこうという肉的な欲望に押し流されることのない、主からの使者であったということがよく分かります。

彼は、人々が押し寄せてくるという、外に現れた結果を見ようとはしていませんでした。彼の使命は、多くの人々を集めることではなくて、主の道を備えることであつたのです。

すなわち、人々の霊を、神の方向に向けることでありましたから、まだ形式宗教に捕らわれたまま、自分にしか向いていない人々を見て、そんな人々がいくら集まってきたとしても、ヨハネは喜べなかったのです。というより、伝えたいことの表面だけしか受け取っていない人々に対して、聖なる怒りすら覚えたのです。

人間は、ある考え方に固定してしまうと、全く新しい思想を聞いたとしても、その新しい思想を、今までの固定観念の中に無理やりはめ込んでしまおうとするのです。そうすれば、必ずその新しい思想は、そのままその人の中に受け入れられることなく、変形して入り込むことになるのです。固定観念の強い人ほど、これが激しいのです。

各々の環境や教育の中において形造られた固定観念を、すべての人は持っていますから、その固定観念を捨てなければ、キリスト信仰は入っていかないのに、固定観念を持ったまま、その中にキリスト教を無理やり入れ込もうとするので、キリスト教は変形してしまうのです。それは人によって変形し、民族によって変形し、国によって変形して、

異なったキリスト教が生み出されてくる結果となるのです。

もっとも、固定観念すべてが悪いと言うものではありませんが、キリスト信仰は、この世で形造られた固定観念の中に入れ込むことはできないもので、無理に入れようとするなら、必ず大事な福音まで変形してしまうのです。

どんな人でも、固定観念を持っています。持っていない人は一人もいません。私たちが御言葉を聞こうとする時には、できる限り固定観念を取り外した上で、全く新しい地に種を蒔くようにすることが大事なのです。その意識を持つだけで受け入れ方は大きく変わります。すなわち人間的な感覚で聞こうとしないで、神のお言葉をそのまま受けとめようとする素直さが必要となってくるのですが、そのためにはその意識を持つことが最も重要になってきます。

ヨハネが、群衆に「まむしの子らよ」と呼びかけたのは、このような意味においてでありました。マタイによる福音書では、群衆に対してではなく、パリサイ人やサドカイ人に対して語ったように書かれています。それは、特権意識に覆われてしまっている人々の代表として名前が上げられているのですが、ルカによる福音書では、そのような指導者たちによって導かれている民衆すべても、同じ特権意識を持って生きている者としてみなし、「まむしの子らよ」と呼びかけたと見ているのです。

当時のユダヤ人たちは、「私たちの父はアブラハムであって、私たちは神に選ばれた民である」という、民族としての誇りに凝り固まった固定観念を持っていたのです。これは、決して悪い理解だと言うのではないのですが、彼らは、神に選ばれた民としての特権だけを振りかざす者となってしまう、選民としての責任については、目をつぶってしまっていました。この点が問題だったのです。

このような誤った固定観念を持ったままであったから、悔い改めのバプテスマの意味を正しく受け取れなかったのは、火を見るよりも明らかです。それゆえ、ヨハネは大胆に、「自分たちの父にはアブラハムがあるなどと、心の中で思ってもみるな。お前たちに言うておく、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を起こすことができるのだ」と言い、特権意識を持っていては、神の御心を正しく受け入れることができない。主の前に悔い改める必要のある一人の人間であることを自覚し、主の前に砕かれよと言ったのです。砕かれるとは、自己主張をしない者になることです。これまでの自分の考え方がつぶされないままで、神のお考えを受け入れることはできないからです。

これは驚くべき言葉でありました。このようなことを言い得た人は、今までに誰もいませんでした。人々は、ヨハネの権威ある言葉の前に恐れを感じました。それだけではなく、ヨハネはなおも続けてこう言いました。「神の怒りの斧が、すでに木の根もとに置かれている」と言って、神の恐ろしい裁きをも伝えたのです。それゆえに人々は、初めてそこで謙虚にならされ、素直に神のお言葉に聞こうとするようになったのです。

私たちは、ユダヤ人たちのような固定観念を持ってはいませんが、私たちには、私たちなりの世的固定観念を持って生きています。これが、キリスト信仰に生きようとする歩みの大きな妨げとなってくるのです。私たちの考えよりも、神の知恵の方が正しく、すべてを見通しておられると受けとめることができないなら、誰もこれまでの自分の考え方を捨てることはできません。

イエス様が自分を捨てなさいと言われたのは、この固定観念や、今までの価値観を捨てなさいと言うことなのです。

そうすることによって初めて混ぜ物なしに、神の御言葉を、そのまま神の御心として、素直に受け入れることができるのです。

混ぜ物なしに神の御言葉を信じ、受け入れる時に、初めて神の御言葉は力となって私たちの内に働くのです。



小区分 (3:1~14)
24日 3:10~14 悔い改めにふさわしい実

人々は、こそってバプテスマのヨハネのもとへ来たが、ヨハネの語った真意を理解してきたとは到底言えませんでした。それゆえに、その思いを矯正するために、ヨハネは人々に「まむしの子らよ」と厳しい口調で語ったのでした。

そして「神の怒りが自分たちの上に臨まないようにするためには、真の悔い改めが必要であり、たとえバプテスマを受けたとしても、それが形だけであるなら、それには何の意味もない。それ故、あなたがたは悔い改めにふさわしい実を結ぶ必要がある」ということを語り、『私たちはアブラハムの子孫だ』と特権を振り回しても、それで神の怒りから逃れられる訳ではないことなどを、ヨハネはあからさま

に言ったので、聞いていた人々は、一応に不安に包まれてしまったのです。

もしそうであるならば、私たちはどうすれば神に受け入れられるのだろうか。悔い改めにふさわしい実とはどのようなことなのか、考えめぐねた上で、ヨハネに問うたのです。「あなたのおっしゃったその悔い改めの実を結ぶとは、どうすればよいと言われるのですか」。

ここに、3種類の人々が問うたことを、著者ルカは書きとめています。私の推測では、もっと多くの人たちが、口々に、私はどうすれば悔い改めの実を結ぶことになるのですかと問うたでしょう。すなわち、色々な立場の人たちが、自分の立場においては、どうすればよいのですかと、具体的に示してほしいと問うたと考えられます。

人間というのは、直接自分の立場に合った答えを聞かないと安心できないものです。それは基本となる答えを聞くことによって、それを土台にして、自分にふさわしい語り掛けを、自分に適用することできる人が少ないからです。

しかし、著者ルカは、3種類の人々に対するヨハネの答えだけで、ヨハネの言おうとする内容が十分に伝えられると見たのでしょう。その第1は、群衆全体に対して、第2は取税人に対して、第3は兵士に対して語りかけています。

この3種類の人たちに対して語られた内容を見ますと、ヨハネの心が次のようであったと考えることができます。「私はあなたがたにそんなに難しい要求をしているのではない。ただ次の事柄を守りなさい。神はあなたがたをあわれんで下さっています。ですからそのことを知って、人に対してあわれみを施していく者となりなさい。決して、自分だけの満足を求めてはなりません。それだけではなく、罪を行うことを喜びとしないで、罪から離れるようにしな

さい。これが悔い改めの実なのです。

そのように向かっていく魂が、神に近づけられる魂であり、そのような魂が、救い主に会うことができる魂なのです。この世の欲をむさぼっている生き方のままではいけません。それは神から遠く離れた状態だからです」と。

ヨハネは、各々の立場にいる人たちに対して、悔い改めの実を結ぶとはどういうことかを教えています。イエス・キリストの救いがすでに成就している今の時代において、このことは私たちにとって、どのような勧めがなされていると受け取るべきでしょうか。これは、イエス・キリストがおいでになるまでの勧めであって、もはや無用の事柄だと言うべきでしょうか。このことを考えておく必要があります。

このことは、決して私たちに無用な過去の勧めなのではありません。悔い改めにふさわしい実と、悔い改めのバプテスマとは、真の救いを頂くためには必ず通らなければならない事柄なのです。悔い改めが十分になされていない魂は、イエス・キリストの救いを頂いたと思っていたとしても、世の欲のままに生きようとする思いが十分に砕かれていないので、真の救いが理解されることはないのです。それは、世の欲のままに切る生き方が砕かれないうままの、自分にとって都合の良い、満足を与えてくれるだけのキリストの救いを見ていることになってしまうからです。

それ故、世の欲のままに生きようとする思いが砕かれ、罪から離れ、善を行う方向に生き方を修正される所の悔い改めにふさわしい実を結ばなければ、キリストによる真の救いにあずかることはできないのです。

私たちは、このことをごまかして生きてはいないでしょうか。私たち信仰者は、内側に起きてくる世の欲をそのま

まにして生きていこうとする思いと戦っています。そして、私たちの内に悔い改めるべきことが多く見出され、徐々にその悔い改めの実が結ばれていき、豊かに実っていくならば、その救いの喜びもますます完成へと近づけられていくのです。私たちの救いが完成へと進められるためには、今も、悔い改めの実を結んでいなければならないのです。



小区分(3:15~17 メシヤのなされるみわざ)
25日 3:15, 16
自分の感覚に頼ってはならない

非常に多くの人々が、ヨハネの周りに集まってきました。ヨハネ自身も、これ程の大成功を納めるとは思ってもみなかったのではないのでしょうか。ある意味で、当時の人々が、どれだけ神の御言葉に飢え渴いていたかということが、このことでよく分かります。それというのも、メシヤ待望の機運が高まってきていたからです。

そんな時期に、バプテスマのヨハネが、神の使いとして彗星のように現れ、ヨルダン川のほとりで、昔の預言者の

スタイルのまま、しかも威厳ある言葉を持って神の言葉を語り始めたのですから、人々はその鋭い語り掛けに心を打たれ、感動するだけではなく、心に痛みを覚える語り掛けを聞き、ひょっとしたらこの人が私たちの待ち望んでいるメシヤなのではないだろうか、という期待が膨らんできたのは当然と言えば当然かもしれません。

メシヤ待望が大きくなっていったというのはよいことではありますが、民衆の期待には、一つの大きな勘違いがあったのです。それは、彼らが望んでいたメシヤは、単に、自分たちユダヤ人をローマの属国として虐げられていた状態から自由にしてくれる力ある救い主という、都合のよいメシヤであって、神は、このようなメシヤを、私たち民族のために遣わして下さるのだと、彼らが自分たちの肉の感覚に頼った勝手なメシヤ観を作り出していて、それを求めていただけであったということです。

このことは、イエス様に対しても要求しようとしたのです。それは、自分たちのメシヤ観をイエス様に押し付けようとして、驚くべき奇跡をなされたイエス様を王にまつり上げようとしたことから分かります。(ヨハネ 6：15)

人は誰しも、自分の肉の感覚によって、事を判断しやすいものです。しかもその判断が、神の御心に反していても知らないでいることが多いのです。しかし、人間の肉の感覚ほどいい加減なものはありません。肉の思いに支配された感覚は、神の御心に沿うことは有り得ないのです。それ故、そうした感覚を頼りにした向かい方をせず、神は、御心を私たちにどのように示しておられるのか、いつも神に問い掛けていなければ、私たちは正しい判断をすることができないのです。

しかし民衆は、それをしないで、自分たちの心の中で思

い込んでしまったものをかたくなに持ち続けていたのです。これでは御言葉の中に、神の御心を聞き取ることはできません。自分の肉の感覚で物事を判断していくことが、どんなに神の御心に反しているかを悟り、聖霊の助けによって御心を聞き取っていくことが重要なのです。

ヨハネは、民衆の心を察していました。人々は私のことをメシヤだと期待している。そこでヨハネは、自分に与えられた大事な使命を果たす機会がここに整えられたことを知ったのです。すなわち、ここに、彼の内にある預言者としての信仰が非常に生き活きとして描かれているの見させられます。

もちろん、預言者も人間ですから、うっかりすると大群衆からの人気を博したこの成功に酔いしれてしまって、その肉の誘惑に負けないとも限りません。しかしヨハネは、そんなことにも何ら心を動かされることはなかったのです。なぜなら彼にとって、神から与えられた使命を果たすことが、彼の命そのものであったからです。しかしヨハネは、この時こそ、後からおいでになるキリストを人々に指し示す時だと受けとめて、「私はあなたがたが期待しているようなメシヤではありません。私の後からこられるお方、その方こそキリストです。私はその方の奴隷としてお仕えすることすらできない、取るに足りない者なのです」と。

ヨハネがこのように証言した時、人々は、メシヤのような威厳に満ちたヨハネが、その足元によることすらできないと言われているお方とは、一体どんなお方なのだろうか、と思ったことでしょう。

このヨハネの証言で、群衆の期待は一気にすぼんでしまいましたが、後からおいでになるお方へと、目が向けられるようにと仕向けられたのです。すなわち、ヨハネは、自

分の感覚で判断する、思い込みの強さが群衆の心の中にあつたのを見逃さず、それを打ち壊した上で、目を向けなければならない正しい方向へと目を向けさせ、神のお心に沿った歩みや期待を軌道修正したのです。

信仰者においても、救われた後にも、なお残っている肉の思いがあるので、自分の肉的感觉を頼りにして歩むように誘惑されます。しかし、私の歩みも、私の期待も、すべて御言葉から神の御心を聞くことによって、初めて正しく向かうことができるようにされるのです。御言葉から神の御声を聞くというのは、一朝一夕にできるものではないし、そこには真剣な祈りと忍耐とが必要になってきます。けれども神は、この方法以外では御心に沿った歩みにならないことを、ヨハネの記事を通して教えておられるのです。



小区分 (3:15~17)
26日 3:16 聖霊と火によるバプテスマ

人々は、ヨハネのことを約束された救い主ではないかと考えました。このことは、ヨハネにとっては、大きなサタンの誘惑となって迫ってきたのです。しかし、彼はこのような誘惑に心を動かされないばかりか、人々にはっきりと、

「私は救い主ではない」と宣言したのです。

これだけで、ヨハネの信仰がどのようなものであったか、その信仰深さが私たちにも感じられます。私たちの信仰を揺り動かそうとする大きな誘惑に対して、私たちはどのように対処していくのか、すべての信仰者においても、このテストを通される時があります。

どのような形でおいしそうな人参を、目の前にぶら下げられるようなことがあったとしても、神からの使命を果たすことの方が、自分にとってもっとも大事なものとして受けとめ、それが自分の信仰において生きる命となっているかどうかによって、そのテストに合格するか合格しないかが明らかにされます。

ヨハネは、この誘惑の時においてこそ、神からの使命を果たす導きの時として受けとめ、人々に対して、やがておいでになるキリストを指し示したのです。そしてこのお方として下さることに触れていきます。すなわち、このお方は、聖霊と火とによってバプテスマを授けて下さるのだと。

ヨハネは、自らの授けている水のバプテスマは、あくまでこのお方の準備に過ぎない。本当の救いのバプテスマを施して下さるお方がいます。このお方こそ救い主であって、そのお方の授けて下さるバプテスマは、聖霊と火によるものだと言ったのです。

このように人々に語った時、ヨハネ自身、この聖霊と火とによるバプテスマというものを、どのように考えていたのでしょうか。又、イエス様はそれを私たちの上に、どのような形で成し遂げて下さったのでしょうか、そのことを考えなければなりません。

ある学者は、聖霊と火とのバプテスマとは、17 節に語られているメシヤの大審判（この世界が終わる時、神を信

じてきたかどうかで裁判される時があると言われていま
す)が来るとの比喩的表現だと言います。すなわち、こ
こで言う聖霊とは、神の息のことであって、神の息は、旧約
聖書においては、神の裁きを表わす比喩で、火と結び合わ
せて語られている場合は、なおさらそうだと言うのです。
果たしてそうでしょうか。

ヨハネが、自分の施している水のバプテスマに対比して、
救い主は聖霊と火とによってバプテスマを授けて下さると、
紹介しているのですから、単に、裁きのためにこられると
言ったとは到底考えられません。

それでは、聖霊によるバプテスマとは何のことを指して
いるのでしょうか。これは、私たちを聖霊の中に浸して聖
霊漬けにし、私たちをきよめ、聖霊によって、神の御思い
を知っていく者にされていくことを指しており、人はその
バプテスマを授けられることによって、初めて聖霊の導き、
聖霊の助けを受ける者へと変えて頂けるのです。

ヨハネ自身、母の胎内にいる時から聖霊に満たされてい
たことが明らかにされています。(1：15)ですから、自
ら聖霊の満たしがどのようなものであるか深く味わってい
たのです。

しかしこれまでは、聖霊は誰にでも与えられるようなも
のではありませんでした。特別に選ばれた者の上にだけ聖
霊が注がれていました。このような特別の聖霊の満たしが、
これからはすべての人に与えられるようになるために、メ
シヤがすべての人に聖霊によってバプテスマ(浸すの意)
して下さると考えていたのではないのでしょうか。

聖霊の中に浸されることによって、人は全く生まれ変わ
ります。聖霊の中に浸されていない者に、聖霊の思いも、
聖霊の導きも、聖霊の助けも分かりませんが、聖霊に浸さ

れることによって初めて、その経験をすることができるようになるのです。

それではどのようにしたら、聖霊に浸されることができるようでしょうか。悔い改めた者に水のバプテスマが注がれたように、救いを求め、聖霊を求める者に対して、主は聖霊の中に浸して下さると言うのです。すなわちこれは、神の一方的な恵みの行為なのですから、私たちは、これを謙虚に求める以外にないのです。そしてその約束を素直に信じる以外にないのです。

それでは、火によるバプテスマとは何のことでしょうか。火は、裁きを思わせる言葉であります。この時ヨハネが心の中で考えていたのは、マラキ3：2、3のメシヤ預言ではなかったでしょうか。「彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである…」メシヤは精錬をし、洗浄をされるお方であります。火によるバプテスマとは、私たち一人一人を、火の中を通されるということでもあります。その結果、私たちの中にある汚れたカスを焼き尽くして浄化されるのです。すなわち、火を通して私たちを神の義にかなう者となっていくように、練りきよめて、そのカスを除き去って下さるのです。

聖霊によるバプテスマ、火によるバプテスマは、終わりに至るまで続けられていくものです。私たち信仰者は、聖霊の中に浸し続けられて、聖霊に生きる者とされ、火の中を通されて練りきよめられていくのです。これは楽なものではなく、厳しい救いではありますが、神の与えて下さる完全な救いなのです。

この完全な救いを提供することにメシヤの使命があったのです。それ故に、私たちは救われただけではなく、終わりの日に向けてきよめられ、完成されていくために、今も

なお、キリストは、聖霊なる神として生きて働き続けて下さっているのです。ヨハネはこのようになっていくことを、心に思い浮かべていたのでしょう。



小区分 (3:15~17)
27日 3:17 より分けられるメシヤ

ヨハネは、やがておいでになるキリストが、聖霊と火とによってあなたがたにバプテスマを授けて下さると人々に証言しました。人々はそれをどのように聞いたのでしょうか。「なんだ、この人はメシヤではないのか」と失望の色を表していた人々も多くいたことでしょう。

ヨハネは、そのような人々の反応に何ら臆することはありませんでした。ヨハネが願っていたことは、自分がどう思われるかということではなく、何とかして人々の心を、やがておいでになるキリストの方へ向けようとするだけであつたからです。

しかも、人々が期待しているような政治的な意味でのメシヤではなく、神が、預言者を通して伝えてこられた真のメシヤとそのみわざを待ち望む方向へと向けさせようと、語り続けたのでした。

聖霊と火によってバプテスマを授けて下さるお方は、又、裁き主でもあるということ、人々に分かりやすい比喩をもって語ったのです。分かりやすい比喩ではありますが、その内容は、人々の思いをピリッとさせる厳しいものでありました。

この比喩は、当時の農業のたとえです。脱穀された麦は、殻と実をより分けなければなりません。そこで熊手（長さ 1,8m程の柄の先に 5,6本の歯を熊手形に結び付けたもの）ですくい上げ、空中で風を利用して穀粒とわらとを吹き分けるのです。荒くより分けられたものをさらにシャベルで空中にすくい上げて穀粒ともみがらとを完全により分け、倉庫に入れる前にふるいにかけて精選し、貯蔵したのです。

箕とあるのは、熊手のことではありますが、ここでは特定のものを指しているとするよりも、完全により分ける農具という意味で語っていると見る方がいいでしょう。

救い主なるキリストは、このように完全により分ける農具をもって、私たち人間をよいものと悪いものにより分けるためにこられたと言うのです。よいものは神の国に入れ、悪いものは地獄の火で完全に焼き尽くされるとヨハネは言うのです。

これを聞いた人々は、どのように受けとめたでしょうか。ユダヤ人たちは、終わりの日の裁きがあることを信じていたので、それ程ショッキングな内容だとは思わなかったでしょうし、自分たちは、神に選ばれた民であるから、必ずよい方により分けられるものだと思い込んでいました。神の民でない者は、当然焼き尽くされるという意味での神の裁きだと聞いたはず。それ程の、彼らの堅く信じていた思いを、この言葉一つで根底から矯正するまでには至ら

なかったと思われます。

しかし、主の裁きについて、思いが矯正されるかされないかにはかかわらず、キリストの裁きは、ユダヤ人たちの思い込んでいる基準によってではなく、神の基準によって行われることが事実なのであります。それに対して誰も口を挟むことのできない厳粛な事実なのであります。

ユダヤ人たちは、主の裁きについて甘い考え方を持っていて、彼らの思いにはもっとも大切な謙虚さが欠けていました。「自分たちは選民だから大丈夫だ。」これは確信を持った信仰的な思いのように聞こえますが、重要なことを見逃してしまっている単なる思い込みであったことに、ユダヤ人たちは気がついていなかったのです。確信と思い込みとは、似ているようですが、根本的な信仰姿勢が異なっているのです。

単なる思い込みには、根拠を自分の思いに置き、神のお心を何よりも大事にしようとする謙虚さが見られないのですが、確信とは、まず神の御前に謙虚な思いで立たされつつ、神のお心が何であるか聞く姿勢を持ち、そして神の御心をを何よりも大事にしようとし、信仰をもって主の約束を確かなものと受け取らせて頂くことなのです。

私たち信仰者も、主の裁きの時に、ユダヤ人たちのような単なる思い込み信仰であってはならないのです。「私たちは、神に選ばれて信仰者として頂いたのだから大丈夫だ」と確信して告白できることは素晴らしいことなのですが、それが単なる自分の思いで思い込んでいただけであったとしたら、その裁きの時に、お前なんか知らないと言われたら、こんなにみじめなことはいけません。

終わりの日に、信仰者であったからというのではなく、キリストを信じる私たちの信仰を見て、「あなたは義だ（神

の目から見て正しいと見られること)。私はあなたを神の国へ迎え入れよう」と、ただキリストのあわれみによって神の国へ入れて下さるとの約束を頂いていると確信できないなら、平安を頂きながら、今を歩くことはできません。

この確信を持って歩くことができるように、キリストは命を捨てて下さったのであるから、その恵みとあわれみとを軽く考えてはなりません。ただ神からの一方的な恵みによって義と見て頂いているとの謙虚な信仰からひと時も離れず、その信仰と喜びとを味わい続けていないなら、私たちは、すぐに義とされた状態から外れていこうとする肉の姿が出てくるのです。

このサタンの働きかけに惑わされて、義とされた状態から落ちないように、主にすがり続けていなければなりません。神の国に入れられるのが当然であるかのようにおごって、神に対して不遜であってはならないのです。

信仰から謙虚な思いが欠けると、その信仰は、神の恵みに対して感謝のない、手前勝手な信仰になってしまいます。神の選民だからと言って、主の裁きから逃れることができるのではなく、ただキリストの故に、その恵みを信じ、キリストによりすぎる者だけが、主の裁きから逃れさせて頂けるのです。私たち信仰者も、主の裁きの前に、謙虚な思いを持って立たされる時がきます。その時に、よい方により分けて頂けるようにと、ただ主のあわれみによりすぎるしかないのです。

それだけではありません、終わりの時は近いのです。それ故、主の裁きの前に置かれている自分というものを考えて、主の御前に謙虚でいることの大事さを忘れることなく、主によりすがって歩まなければならないのです。



小区分（3：18～20 ヨハネの投獄）
28日 3：18～20 神からの使命

ヨハネはメシヤが来て、聖霊と火とのバプテスマを授けて下さること。それだけではなく、裁き主としてお立ちになることを民衆に示しました。このことによって、民衆の目は、後からこられるメシヤに向けられたのでしょうか。この記事からだけではよく分かりません。「ほかにもなお、さまざまな勧めをして民衆に教えを説いた」と記されています。何とかして人々に主に会う備えをなさせようと、その使命に燃えているヨハネの姿が感じられます。

悔い改めを迫るヨハネの手は、一般民衆の上にだけ差し伸べられたものではありませんでした。当時の宗教指導者であったパリサイ人、律法学者たちの上にも、さらに社会的権力者たちの上にも必要性を訴えて迫っていったのです。3：7～9で語られている、叱責の言葉に等しい厳しい語りかけが、領主ヘロデに対しても語られていました。迫ってきている神の怒りは、たとえ領主といえども逃れることが

できないことが明らかにされています。

ヘロデは、その非難に対する報復措置としてヨハネを投獄したのです。7：18～23 に、ヨハネのその後の記事が少しだけ記されていますが、その記事から見て、ヨハネはそのままずっと投獄されたままであったことが分かります。そして、領主ヘロデの妻ヘロデヤの策略によって、殺されてしまったのです。

ヨハネが宣教できた期間は、宣教開始の時から、ヘロデに投獄されるまでのわずかな期間だけでありました。生まれる前から備えられ、荒野において長い長い準備期間を経て、宣教を始め、いよいよこれから本格的に進められていくかと思われる状態であったのに、ヨハネの使命を果す期間というものはあまりにも短かったのです。

しかし、短期間ではありましたが、その使命の大きさ、その重要さは、人間の中で最高のものでありました。イエス様がヨハネのことを、「女の産んだ者の中で、ヨハネより大きい人物はいない」とおっしゃられましたが、ヨハネが偉大なのは、ヨハネの人格そのものというよりも、神に与えられた偉大な使命の故であったということ言うまでもないことでしょう。

それ故、短期間であろうと、長期間用いられようと、神の側から見るとそんなことはどちらでもいいことなのです。神は、その使命が果たされようとしているかどうかだけを見ておられるのです。人間的に見るならば、ヨハネの宣教は、中途半端で終わってしまったように見えます。しかし、それはあくまで人間的な見方であります。

もし、使命が果たされていなかったとしたなら、むざむざヨハネが捕らえられ、殺されてしまうようなことを、神はお赦しになる筈がありません。ヨハネの、先駆者として

の使命は十分に果たされたと見られたのです。著者ルカもそのことを読み取って、ヨハネの使命が果たされたと見たので、次のメシヤ到来の方へと目を向け、ヨハネから主イエスへのバトンタッチを明確にするのです。

このように、神に与えられた使命が、妨げようとする人間によって損なわれることはないということがよく分かるのです。たとえ人間的に見て、その使命が果たされなかったかのように見えることはあっても、神の目から見て、「それでよし」と言われているのです。もし果されていなかったならば、神はどのようにしてでも助けられ、使命を果たし終えることができるようにして下さる筈です。

私たち一人一人にも、神からの使命が与えられています。その大小の違いはあっても、神から与えられていることには何ら変わることがありません。私たちが生かされている間、その使命を果たすようにと神が与えて下さったものであり、神がそのために私たちを召して下さったのです。

私たちがその与えられた使命を信仰によって受けとめ、その使命から目を離さないでいるならば、必ず果し終えるまで主は助け導いて下さるのです。もし、私たち人間の目で中途半端で終るように見えたとしても、私たちさえその使命から目を離さないでいたなら、神の目から見て「よし」と言って下さる筈です。

その使命は、たとえどんなに小さくてもよいのです。他の人に与えられた使命と比べる必要もないのです。神が一人一人にふさわしい使命を与えて下さっているのですから、それを素直に喜んで向かえばよいのです。そして、結果も主にゆだねてしまえばよいのです。人間は結果を要求しますが、神は結果を要求されないからです。



小区分（3：21,22 イエスのバプテスマ）
29日 3：21、22 主イエスへの神からの任命

さてヨハネの、先駆者としての使命が果たされたので、救い主登場の舞台は整いました。いよいよ救い主の登場です。しかしイエス様にとっては、救い主としての準備がまだ完成されてはいませんでした。その完成を示すのが、ヨハネからバプテスマを受けられた時に聞こえてきた、神の任命の声だったのです。このように書くと、イエス様はその時までは不完全だったのかという疑問が起きてくるかもしれません。その疑問にも明確な回答が必要だと言えるでしょう。

イエス様がバプテスマをお受けになったことからして、理解しにくい事柄であります。イエス様はなぜ、水のバプテスマを受けられる必要があったのでしょうか。水のバプテスマは、罪の悔い改めのバプテスマでありますから、罪のない神の子であるイエス様にとって、不必要なものである筈なのに、どうしてお受けになったのでしょうか。

「あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると責めうるのか。」（ヨハネ 8：46）とイエス様ご自身、罪のないこ

とをはっきりと語っておられます。ペテロの手紙においても、「キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった」（Ⅰペテロ2：22）と明らかにされています。

マタイによる福音書においては、ヨハネは、イエス様がバプテスマを受けようとするのを見た時、思いとどまらせようとして、「わたしこそあなたから聖霊のバプテスマを受ける立場ですのに」と言いました。そのヨハネに対して、「私が受けるのは、すべての正しいことを成就するため」と言われて、イエス様はバプテスマをお受けになったのです。到底その深い意味を汲み尽くすことはできませんが、この点だけは捉えておかなければなりません。罪人である人間を救うためには、唯一罪のないイエス様が、罪人と同じ立場に立たれる必要があったと言うことです。それ故、罪人と同じ所に立って水のバプテスマを受けられる必要があったので受けられたのだと言うことです。

罪のないイエス様が、罪人と同じ立場となってバプテスマを受け、十字架への道を歩み、罪人の身代わりとして、罪人のように、罪を背負って死んで下さったのです。このようにイエス様のバプテスマの意味は、十字架において現わされていることに通じています。だからヨハネは第1の手紙で、「このキリストは、水と血とをとっておられたかたである」と言っています。（5：6）

イエス様のバプテスマについて考えてみましたが、ルカによる福音書では、イエス様がバプテスマを受けられたということは、そんなに中心的な事柄として扱ってはいません。それよりも、その後の、祈っておられるイエス様の上に聖霊が降り、神からの任命、神からの承認の声が語られたことに目が向けられています。それ故に、ここにおいて、ヨハネは舞台から引き下がり、イエス様の方へと完全にバ

トンタッチされていくのです。

救い主としての準備として、なぜイエス様にとって、神からの任命の言葉が必要だったのでしょうか。神の子であるなら、わざわざ任命の言葉を必要としないように思えます。ここで考えておかなければならない重要な事柄があります。それは、神が、イエス様をこの世にお遣わしになった時、どのようにしてお遣わしになったのかという点です。神は、イエス様を完成された成人としてお遣わしになったのではありません。又、単に人の形を取られただけの天的なお方としてこられたのではありませんでした。

ヨハネ1：14において、「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った」と言っています。又、ガラテヤ4：4には「神は御子を女から生まれさせ…」とあります。すなわち、イエス様を完全に人と同じ道を歩ませられたのです。それ故、神からの任命を受けるまでの幼・少・青年期は成長途上にある人間でありました。とは言っても、全く人間と同じというのではありません。人間と異なっているもっとも重要な違いがありました。それは罪を犯されなかったと言うことです。

神からの任命、神の承認があったことは、イエス様にとって重要な転機でありました。それは準備も任命もいらないうちの人の形と取っただけの神なる存在ではなかったからです。又、最初から全く成長される必要のない完全な人としてこられたのではなかったからです。

神がイエス様を、成長していく人間として世に遣わされて、30 数年の準備の時、成長の時を与えられて、いざ出陣という時、イエス様は、神からの承認の言葉によって救い主たる使命を確認されました。そして立たれたのです。もちろん、この時から神の子になったというのではありません。

せん。こんな愚かなことを真剣に考えている神学者（聖書を学問的に研究する者であります、正しい研究をする人と、人間的な学問に落としてしまう人がいます）がいるというのは、話にもなりません。

神が、イエス様を召し出され、今、立ち上がる時だよと押し出されたのです。この神のお言葉が、イエス様にとってなくてはならないものであったのです。22節の天からの声は、「あなたは私の愛する子だ。私の計画通り、十字架の道を歩みなさい」との神の声のように私には聞こえてきます。十字架にかがるために生まれ、十字架にかかるために育ち、十字架にかがるために、明確な神の任命を受けて立たれたイエス様が、ここに描き出されているのです。神の愛と御子の従順とがここに一つに合わさり、痛みを覚えつつも、神の御子を十字架の道へと押し出しておられる神のお心が見えるのです。

この時で、イエス様の救い主としての準備は全く完了しました。聖書には詳しく記されてはいませんが、この時のイエス様の強い決意を見ることができます。これらのことを考える時、一つのことを思わされます。何と私たちは愛されていることでしょうか。詩篇の作者の叫びが、今の私たちの口からも出てくる経験をさせられるのです。

「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか。人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。」（詩篇8：4）これ程までに、私たちは神の愛と御子の愛とに取り囲まれているのです。わざわざ成長していく者として母親の胎内から生まれるようにされ、すべての人間と同じ道を辿って下さいました。そして従順に、十字架の道を歩み通して下さったのです。何という愛でしょうか。パウロはこのことをピリピ2：8でこう言っています。「おのれを低く

して、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」

私たちは、これ以上の愛を知ることはできません。この愛に勝るものは何一つないからです。この愛のすごさが分からない者は、何とみじめでしょうか。人間にとって最高のものが分からず、又、それを喜んで頂こうとしないのですから。

小区分 (3:23~38 イエスの系図)
30日 3:23~38 あがないの系図)

イエス様の救い主としての準備が全く完了しました。そこで、宣教を始められたイエス様の年齢や、系図などを書いていくのです。こんなところにルカの丁寧な筆法が見られます。

ユダヤ人は、系図を重要視していました。ユダヤ人のために書かれたと言われているマタイによる福音書に系図が記されているのは当然であります。ルカは、異邦人のためにこの福音書を書いたのに、どうして系図を書き入れる必要を覚えたのでしょうか。又、この系図を通して、何を読者に訴えようとしたのでしょうか、それを考えてみる必要があります。

マタイによる福音書では、アブラハムを祖先として、そこから下って行って、イエスに至る系図を記しています。これは1:1にあるように、アブラハムに約束され、ダビデに約束された救い主が、イエスなのだということを示そうとしています。すなわち、この系図は約束の系図というものです、それに比べて、ルカの記した系図は、全く意図

が異なっているということがひと目見て分かります。

マタイの系図とは反対に、イエスからさかのぼって、その起源をたどっていく書き方がなされているのです。しかもアブラハムで終らず、アダムにまでたどっていき、そして、その根源を神に結び付けているのです。すなわち、この系図は、あがないの系図だということが出来ます。

神は人をお造りになりました。しかもご自身に似せてお造りになったのです。にもかかわらず、人はその似姿を捨てて、罪の衣を着る者に落ちてしまったのです。それからの人間の歴史は、罪に汚れた人間の歴史でありました。しかし、どんなに汚れていても、人間は神から愛される対称としてはずされなかったのです。これは何という計り知れないあわれみでしょうか。今日の歴史と言え、人物ではなく事件を中心に記されていると考えられるでしょう。しかし、聖書の歴史は、神と人間との関係における歴史でありますから、系図が歴史の中心に置かれているのです。

墮落した人間の歴史が、アダムに始まってヨセフにまでつながっています。しかし人々にはヨセフの子と思われたイエスが、比喩的な表で言うならば、罪のない第2のアダムとして登場する時、人間の罪の歴史はそこに終わりを告げ、あがないの歴史が始まるのです。

神は、墮落したアダムの子孫を、罪の中に放置したままにされることができず、第2のアダムであるキリストを立てて、全人類を救おうとされました。それをパウロは、ローマ5:18, 19で「このようなわけで、ひとりの罪過によって(アダムの事)、すべての人が罪に定められたように、ひとりの義なる行為によって(第2のアダム、キリストの事)、いのちを得させる義がすべての人に及ぶのである。すなわち、ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人と

されたと同じように、ひとりの従順によって、多くの人が義人とされるのである」と語っています。

いつもパウロの傍にいて、各地を伝道して回ったルカでありましたから、パウロのこの信仰思想を自分のものとして、この信仰に立っていたと推測することができます。

この系図を通してルカが語ろうとしていることは、これから宣教を始められるイエス様は、神が第2のアダムとしてお立てになったお方だと示すことだったのです。それ故に、この系図は第2のアダムの系図であり、アダムの罪過に覆われた罪の歴史がここで終わり、第2のアダムによって全く塗り換えられてしまうというあがないの歴史が始まるのです。

イエス様が、天的な存在としてではなく、アダムの子孫として、罪に汚れた人間の形を取って、この世において下さったということが、2度と回復する可能性がないと思われていた汚れた罪人の歴史の流れを、ここで一気に変えるためであったことが分かります。

こうまでして、神なるお方が、卑しい人間の姿を取り、全く人となって下さって、そのあがないのわざを成し遂げようとして下さる、そんなイエス様の公生涯が、これからいよいよ始まろうとしているのです。

第2のアダムとしてのキリストのお働きを、又、導きを、私たちは漏らすことのないように、見つめていかなければなりません。そうすることが、神のあわれみ深い愛に、正しく応えていくことであります。無味乾燥な系図も、それを全体として見る時、神のあわれみと愛とが、そこに深く込められていることが感じられ、感謝の思いにあふれずにはおれないのです。神の御言葉に何一つ無駄なものはないということがよく分かります。



☆ 追補 ☆
（おまけの随想です）

随 想

使徒行伝ところどころ
1 : 1, 2

ルカは、テオピロがキリスト信仰に立って、
力強く、しかも喜びに溢れるようにと、
この書を書いた。

そこには驚くべき聖霊の働きが、
心臓の鼓動のように休むことなく、
諦められることなく、正常に活動させようと、
働き続けている。

なぜ聖霊はそこまでなされるのだろうか。
信仰者を整えたくて、育てたくて、
押さえられないかのように、
働き続けておられる。

テオピロがこのことを知って、
聖霊で前進してくれるように、
ただそのことだけを願って、
この書を書いている。



随 想

使徒行伝ところどころ 1 : 3

主イエスは、ご自分の生きておられることを、
すなわち、よみがえられたことを、
これでもか、これでもかとお示しになられた。
なんとかして、
人々のかたくなな心の目を聞こうとして、
ご自身の真実なることを、
繰り返し、繰り返し現された。
主が、こんなにまでして下さったが故に、
私のようなかたくなな心も、
うち開かれて、
復活の主を見ることができるようになった。
本当にありがたい。



随 想

使徒行伝ところどころ 1 : 6, 7

私たちは、神のみこころをすべて知りたいと願う。
しかし、
神が知らせようとしておられない所まで入り込んで、
神の権威を犯してはならない。
知るようと、示して下さっている事柄だけで、
私たちは満足しなければならない。
神の権威を踏みにじっても、
平気である神学者や異端が何と多いことであろう。
これらに惑わされてはならない。
私たちにとって大切なのは、
神の権威を尊ぶことなのである。



随 想

使徒行伝ところどころ 1 : 9~11

イエスが天に昇って行かれた。
ずーっと私たちの側にいて下さったらいいのに、
また、すぐにでも降りてきて下さるのではないかと、

淡い期待を持って、昇って行かれた天を見つめていた。
御使いは、そんな弟子たちを叱られた。
いつまで未練を持って、上を見上げているのだ。
キリストが教えて下さったことを忘れたのか。
「私がいかなければ、助け主がこないのだ」と、
それをどうして悟らないのだ。
あなたの側にあって歩いて下さるお方の助けが、
どんなにすごいものか。
まだ分かっていないのか。
助け主のいない人生は、
サタンの喜ぶ人生だ。それがまだ分からないのか。
いつまで経っても鈍いままである者を、
それでも見捨てず、
悟るまで待ち続けて下さっている。
助け主が側にいて下さる素晴らしさが分かったら、
飛び上がって、踊りたくなるに違いない。
それを期待して、
神はいつまでも待って下さっている。
何と言う忍耐だろう。



随 想

使徒行伝ところどころ
1 : 14

心を合わせてひたすら祈りをしていた。
これは何とうるわしい光景だろうか。
神に向かって祈る時、
私たちは心を一つに合わせられている。
協議をすることによって一つになれるのか、
共に奉仕することによって一つになれるのか、
一致しようと叫ぶことによって一つになれるのか、
確かに何もしないよりはましかもしれない。
しかし、本当に一つ心になろうとするなら、
全員が神に向かってひたすら祈ることしかない。
そうすれば、人の力や努力によってではなく、
神によって一つにされるのである。
この姿が、本当にうるわしい姿であって、
他はまやかしに近いことが多い。
ひたすら祈ること。これ以外にない。



随 想

使徒行伝ところどころ
1：16～19

ユダは不義の報酬である地所を手に入れたが、
そこにまっさかさまに落ちたと言う。
不義によって歩むと、
自ら不義のわなに陥ってしまうようになるとは、

何と恐ろしいさばきか。
ユダはなぜ、
サタンに心を売り渡してしまったのだろうか。
それは、イエス様が自分の期待していた通りのお方では
なかったから、イエスに対する失望が、
ユダをあのようにならせたのだろう。
この危険は、ユダにだけあったものなのではない。
すべての人にも控えているものである。
ともすれば、自分の期待をイエス様に求め、
期待通りにして下さらないことを知ってがっかりする。
これが、信仰を失いやすい一番危険な時である。
しかし信仰とは、
自分の期待をイエス様に押し付けることではなく、
主が私に何を期待しておられるのかを知って、
主に従うことなのである。
この違いは、天と地との違い程に大きい。



随 想

使徒行伝ところどころ
1 : 24~26

くじによって、
ユダに替わる 12 番目の使徒マッテヤが決まった。
けれどもこのような決定方法は、

あまりにも人間的で、あまりにも幼稚である。
にもかかわらず、神がお決めになったと確信している。
これのどこが信仰的行為なのだろうか。
今日の時代に生きる私たちも、
くじを引いて決定を神にお任せすればいいのだろうか。
ここに人間の限界というものを見させられる。
人は先を見通して決定できる力がない。
すべては神だけがご存知である。
そこに信仰を置いて、
神が私たちの決定すらも支配し、
導いて下さると信じるしかない。
それが、この時にはくじという方法を用いたに過ぎない。
人間的に見て、
それが幼稚であろうと高度であろうと、
神には関係がない。
神の決定のみに従おうとする信仰があるかないかが、
ここでは問われているのである。



(終わりに)

御言葉を学び、御言葉を味わい、御言葉に力を得て歩む人生に、終わりはありません。信仰者は、生涯かけて主と向き合い、主から恵みと力とを受け続けて歩むようにと、この地上に置かれ、サタンのまつわりつくような働きかけ

を受けながらも、肉の思いに引き込まれないように主にすがり、主との深い結びつきを頂いていることに平安を覚えて歩み続けるようにと導かれています。

初心者の方でも分かるように、聖書を学んで頂きたいと、ルカによる福音書を学んできました。これを読むことによって、信仰の思いが芽生えてくるなら、これほどうれしいことはありません。神の御言葉には力があります。それは真実なお言葉だからです。ぜひ見えない神を見ているかのように歩んで頂きたいと願っています。ルカによる福音書をこの後も学んで頂けるように、追加していこうと考えています。もし読んで分からないところがありましたら、メールでも電話でもして頂けるならお答えいたします。

神様があなたの人生を導いてくださいますように…。

2019年8月